

洛西地域映画史聴き取り調査報告Ⅲ

管家紅葉氏談話

京都映像文化デジタル・アーカイヴ — マキノ・プロジェクト —

富田 美香 (本学文学部助教授) E-MAIL mtt20017@lt.ritsumei.ac.jp

紙屋 牧子 (日本大学芸術学研究科博士後期課程) E-MAIL QYQ05142@nifty.com

大矢 敦子 (本学文学研究科博士課程前期課程) E-MAIL Atsuko.Oya@mb2.seikyoku.ne.jp

【解説】御室に咲いた映画の園

本稿は、「京都映像文化デジタル・アーカイヴ — マキノ・プロジェクト —」(以下、マキノ・プロジェクトと略す)のアーカイヴ活動の一環であり、映画都市・京都の源流といえる“マキノ映画”(1919年のミカド商会から1937年のマキノ・トーキー終焉まで)についてのオーラル・ヒストリーの集積を目的とした調査報告である。

マキノ・プロジェクト活動開始から三年目にあたる本年度は、マキノ映画の助監督・管家紅葉(スガヤコウヨウ 本名:管家喜三郎)氏との出会いに恵まれ、マキノ映画内部の視点によるマキノ映画史を編むことができた。管家氏の語りが、これまでのマキノ映画をめぐる言説と大きく異なる点は、マキノ映画を代表する監督、スタッフ、スター達が、あくまでも自身のキャリアと同一視した発展史・興亡史として縦軸の視点でマキノ時代を語っているのに対し、管家氏のそれは、単眼的かつ限りなく水平の視点を保っていることである。管家氏の語るマキノ史は、青春の一時を一助監督に徹して過ごし、後にまったく別の人生を歩んだ管家氏ならではの歴史であると同時に、紛れもなく映画という集団製作の文化史の一面を示すものであるといえる。

1. 管家紅葉氏紹介

管家紅葉氏は本名を管家喜三郎といい、1909(明治42)年5月5日大阪に生まれ、金森万象監督(1893-1982)の書生から専属助監督としてマキノ御室撮影所に入社した。現在まで93年間にわたる

人生のうち青春期の4年間を、助監督・管家紅葉として過ごし、家業であった古川橋の料理旅館経営のためにマキノ映画を退社した。その後は、金森組スタッフらとの個人的な親交やマキノ映画旧友会への参加をのぞいて完全に映画界から離れ、戦後は事業の道を歩み、現在ご家族とともに静かに暮らしている。この管家氏の長い充実した人生の軌跡は、75年以上も前のマキノでの助監督生活について、等身大で鮮やかに再現する驚異的な記憶力と、誇張も憶測も一切交えずに語ろうとするその潔さから、伺い知ることができる。

管家氏のマキノ映画在籍期間は、1925年の末から1929年夏までと推定される。これは、御自身の記憶と、当時の映画雑誌で助監督としての在籍を確認できた時期とが、一致していることによる。まさにこの入社時期は、牧野省三が東亜キネマから独立して東亜マキノ等持院撮影所を一族郎党とともに去り、御室撮影所でマキノ・プロダクションを新規に旗揚げした直後であり、その新しい機運とともに、管家氏ら新スタッフが採用され、活況を呈したことが伺われよう。そして入社後の在籍期間中に、マキノ名古屋撮影所の新設や、『実録忠臣蔵』の焼失、片岡千恵蔵ら大量スターの脱退事件⁽⁴⁾がおり、退社時期は創業経営者・牧野省三の死⁽⁵⁾の前後に相当する。つまり管家氏は、マキノ映画のもっとも内部変動の激しい期間に在籍したと言ってよい。

今回の調査で確認できた管家氏の助監督作品は、管家紅葉氏の名前が報道された13本を含め、『祇園情話 春雨草紙 千代香の巻』(1926年)から『松平長七郎 長崎篇』(1929年)までの23本ののぼり、これらすべてが金森万象監督の作品である。

管家氏が師事した金森万象監督は、日活時代の牧野省三の秘書から映画人としてスタートを切り、マキノ映画倒産まで一貫して師匠・牧野省三の志と行を共にした、マキノ最古参の人物である。マキノの屋台骨を支えた金森監督の作品歴は、教育映画から娯楽活劇、祇園モノと多岐にわたっているが、そのうち管家氏が助監督を担当した作品は、金森監督が最も得意とする娯楽活劇を多く手がけた時代のものである。これらの作品の詳細については、末尾の「管家紅葉助監督フィルモグラフィ」を参照されたい。

2. 助監督の視点——作品とともに走る日常

管家氏の語るマキノ史が、これまで記述されることのなかった稀有な映画史といえるのは、師匠の金森万象というプリズムを介して当時の一助監督が見聞きできた視野を非常にリアルに語るものであると同時に、特殊とも思えるその視点から断片化されたマキノの諸相が、マキノのみならず映画産業の普遍的な姿をあらわにしている点にある。これは、管家氏の談話のすべてが、金森万象の助監督という立場での体験に基づいたものであり、後年に編まれた通史的映画史観に左右されることなく、マキノ映画を包括的に語ろうとするものでもないことに起因している。

たとえば端的な例として、一人一人のスタッフや映画制作時のエピソードを鮮明に語る管家氏の記憶が、前項であげたようなマキノ映画の屋台骨を揺るがしたと思われる事件については見事に欠落しているという事実。すなわちそれは、日本映画史の記述者達が大書してきたこれらの事件を、マキノ映画の大番頭ともいえる金森万象と寝食を共にしてきた管家助監督ですら、自身の助監督生活を左右する問題として相対化することもなく消化していた

ことを指し示し、同時にそれは、高所からの俯瞰的視点とは異なるこのようなクローズ・アップの映画史が、おそらくどの撮影所でも映画作りを支える助手の数だけ存在していたことを示唆しているといえるだろう。

70年以上の歳月を過ぎても変わることのない管家助監督の視点は、まさにマキノ・プロダクション御室撮影所とその助監督という存在を雄弁に物語るものであり、そしてまた、このような多様な視点の集合体こそが、映画という総合体を織り成していく撮影所であり、映画史であることを、教えてくれるのである。

なお、本調査の実現は、管家氏監督作品の製作をご親族の依頼に基づいて企画した視聴者参加型TV番組『探偵！ナイトスクープ』の制作スタッフ四宮氏から、筆者がレフェランスを受けた事に端を発している。このような機会を作ってくくださった『探偵！ナイトスクープ』、仲介者の京都府京都文化博物館森脇清隆氏、管家喜三郎氏とご親族の方々に深謝申し上げます。



『中建国史 大化の新政』近江舞子ロケーションのスナップ 前列左より、マキノ登六(俳優)、管家紅葉助監督、金森万象監督、石野誠三カメラマン、三上良二監督、江原義夫カメラ助手、滝川紅二(金森の)助監督。中列不明、後列左より、澤田敬之助(軽見山彦役)、不明。提供：管家紅葉氏

【管家紅葉助監督フィルモグラフィ】

公開年月日	題名	監督	原作/脚色	撮影	主演	内容
1926.06.15	祇園情話 春雨草紙 千代香の巻(一部地域公開題名「花吹雪春雨草紙」)	金森万象	東美彌子/ 金森万象	石野誠三	都賀静子+マキノ正唯	祇園舞妓と画学生のはかない恋。
1926.07.28	江戸巷説 女怪	金森万象	山上伊太郎	松田定次	大谷友三郎+鈴木澄子	女賊への恋から破滅に到る旗本の悲劇。
1926.12.22	正剣邪剣 前後篇	金森万象	西条照太郎	石野誠三	大谷友三郎+武	酔って犯した女と武士との

洛西地域映画史聴き取り調査報告Ⅲ 管家紅葉氏談話

					井龍三	愛憎劇。
1927.01.10	成り上り者	金森万象	秋篠珊次郎	石野誠三	大谷友三郎+松浦築枝	町人から武士に成り上がった若者の試練。
1927.01.21	狼火	金森万象	山上伊太郎	石野誠三	マキノ正唯+都賀静子	小心者の青年が村と恋人を守る成長譚。
1927.04.22	剣は鳴る 前篇	金森万象	吉川延/西条照太郎	石野誠三	武井龍三+小島陽三	貧しく醜い男が冷酷な剣客として生きる。
1927.06.24	青春(公開前題名「春宵夢」 「戀と若武者」)	金森万象	西条照太郎	石野誠三	嵐長三郎+岡島艶子	出世を夢見た若武士が恋に目覚め人生を知る。
1927.09.01	矢倉	金森万象	寿々喜多呂九平	石野誠三	マキノ正博+東郷久義	旅の若武士が悪将と戦い悲恋に泣く青春活劇。
1927.09.08	砂絵呪縛 第一篇	金森万象+牧野省三+二川文太郎	土師清二/山上伊太郎	石野誠三+田中十三	月形龍之介+鈴木澄子	將軍家世継ぎをめぐる天目党と柳影組との攻防。
1927.11.03	砂絵呪縛 第二篇	金森万象	土師清二/山上伊太郎	石野誠三	月形龍之介+鈴木澄子	柳影組に囚われた姫を救う天目党副首の活躍。
1927.12.15	砂絵呪縛 第三篇	金森万象	土師清二/龍神虎彦	田辺憲治	月形龍之介+鈴木澄子	將軍家後継が決まり、闘いも終わる。
1928.02.17	返り討以上	金森万象	寿々喜多呂九平	田辺憲治	片岡千恵蔵+津村博	仇敵の助太刀に「返り討ち以上」と悔し涙で死ぬ侍。
1928.04.15	小品映画 仇討世相録[あだうち]	金森万象	寿々喜多呂九平	石本秀雄	片岡千恵蔵+松浦築枝	養子夫婦が仇討旅でつかの間の幸福を味わう。
1928.06.01	嵐(公開前題名「輪廻」 「落花乱刃」)	金森万象	内田菊子	石野誠三	マキノ正博+市川小文治	寺小姓が仇敵夫婦を追い詰める。
1928.06.08	天明果報談	金森万象	荒木十三郎/寿々喜多呂九平	田辺憲治	阪東三右衛門+荒木忍	勘当された若侍が悪者を捕まえ恋も得る活躍譚。
1928.07.07	仇討制度[かたきうち]	金森万象	寿々喜多呂九平	石野誠三	実川芦雁+根岸東一郎	兄弟仲の若殿と家臣が、当主の過ちで仇敵に。
1928.09.15	佐平次捕物帖の内第五篇 謎後篇	金森万象	寿々喜多呂九平	石野誠三	近藤伊与吉+南光明	怪盗団天誅盗に挑む目明し佐平次の捕物譚。
1929.01.05	隼六剣士 前篇	金森万象	寿々喜多呂九平	石野誠三	高木新平+東郷久義	平家の後裔六剣士が一門再興の戦いへ挑む。
1929.01.10	隼六剣士 後篇	金森万象			高木新平+東郷久義	成功を収めた剣士達が反目の後に再起する。
1929.03.01	中古建国史 大化の新政	二川文太郎+押本七之助+人見吉之助+マキノ正博+吉野二郎+稲葉蛟児+中島宝三+金森万象	牧野省三/瀬川与志	松浦茂+三木稔+石野誠三+大塚周一+田辺憲二+木村角山+大森伊八+山本米吉	荒木忍+南光明	大化の改新を描いた御大典記念映画の超大作。
1929.03.08	元和豪侠伝(公開前題名「義人」)	金森万象	寿々喜多呂九平	松浦しげる	沢田敬之助+岡島艶子	幕府から追われる侍達と美しい娘とのほかなない交流
1929.06.07	松平長七郎 道中篇	金森万象	悟道軒円玉/金森万象	松浦詩華瑠	沢田敬之助+市川米十郎	巡礼旅の先々で長七郎が人助けの活躍。
1929.08.15	松平長七郎 長崎篇	金森万象	悟道軒円玉/金森万象	松浦詩華瑠	沢田敬之助+市川米十郎	長崎に入港した黒船で役人に包囲された長七郎。

* 製作時の広告に金森監督と管家助監督の名前が記された『ひよどり草紙』『つづれ鳥羽玉』は、監督がそれぞれ人見吉之助、稲葉蛟児へと変わり、管家氏にも担当した記憶がないため、リストから除外した。

* 『探偵綺譚 文明の復讐』(1925.12.04公開、金森万象監督)は、助監督入社前の作品のため除外。本作は、マキノ御室最初の特作品として製作され、衣裳小道具総て新調するなど報道された。

* 管家氏の記憶(談話採録あり)による二川文太郎監督の作品は不明。管家氏が籍中に製作された以下のいずれかと思われる(()内は製作当時の広告や映画館プログラムに記された助監督名)。『延宝奇聞 美丈夫』前後篇(村田正雄)、『修羅八荒』1-3篇、『愚恋の巷 武家気質』(村田正雄)、『悪魔の星の下に』(稲葉蛟児)、『砂絵呪縛』(松田定次+稲葉蛟児+管家紅葉)、『毒蛇』(稲葉蛟児)。このうちフィルム現存作は『延宝奇聞 美丈夫』『砂絵呪縛』であり、「美丈夫」は製作中に金森万象が失恋の傷心旅行で休養中のため、可能性が高い。

* フィルモグラフィ作成主要参考文献: 都村健企画+御園京平編『回想・マキノ映画』(1971、マキノ省三先生顕彰会)。織戸肇『プログラムに見るマキノ時代劇』(1975、織戸肇)。豊田市郷土資料館編『マキノ映画の時代』(1996、豊田市教育委員会)。京都府京都文化博物館編『INTERVIEW 映画の青春』(1998、京都府京都文化博物館)。逐次刊行物『マキノ』(マキノを囲む同人社)、『マキノプロダクション』(映画世界社)、『週間マキノ』(マキノ映画配給所宣传部)、『キネマ旬報』(キネマ旬報社)。

注

- (1) マキノキネマ株式会社とその映画制作現場であるマキノ等持院撮影所は、1924年の合併で「東亜キネマ」となったが、旧マキノ派からの主張による東亜マキノ等持院への組織変更を経たのち、牧野省三は等持院撮影所と従業員を東亜キネマに引渡し独立、1925年6月に同志とともにマキノ・プロダクションを創立し、京都市外御室の天授が丘に撮影所を開設した。
- (2) 名古屋棧橋倉庫会社の土地を借受けて1927年に新設されたこの撮影所は、『実録忠臣蔵』の松の廊下シーンなどが撮影され、1928年1月には現代劇専門としてスタートを切るが、直後の大量スター脱退により、現代劇部門も御室撮影所に併設されることになった。
- (3) 1928年3月におきた火事で、牧野省三が2年の歳月を費やして製作したマキノ史上の大作『実録忠臣蔵』を自宅で編集中、電気からネガに引火し、ネガの大半と自宅を焼失した。
- (4) 1928年4月から5月にかけて起きた大量のマキノ・スター脱退事件。製作・配給・興行の三部制度の確立を目的とし、マキノの四国配給を請け負っていた三共社社長・山崎徳次郎の音頭で、自由配給常設館が「大日本活動常設館館主連盟映画配給社」を設立し、山崎の働きかけに呼応したマキノの映画人がマキノから独立して製作部門に参加した。主な脱退者は、制作現場となる日本キネマの双ヶ丘撮影所をになう河合広始を筆頭とする大道具スタッフや、片岡千恵蔵、市川小文治、中根龍太郎、嵐長三郎(嵐寛寿郎)、山本礼三郎等人気スター。大打撃を受けたマキノは新しい人材獲得とともにノー・スター映画を開拓し、洛西地域はこの脱退者達の活動で撮影所街の様相を呈していく。
- (5) 1929年7月25日没。翌26日に北野天満宮脇のマキノ家で密葬が、29日に御室撮影所で神式による本葬・告別式が行なわれた。これらの様子はマキノ映画の監督総がかりで記録映画に収められた。

洛西地域映画史聴き取り調査報告 3

管家紅葉氏談話

I. マキノ入社

1. 入社経緯

——マキノ映画に入社された経緯を教えてください。

私は大阪でよく映画を見てましてね。今の大阪工大の前身の、関西工学専修学校という学校の学生やったんです。天神に八千代館というのがありましてね。それから天六に弥生館、国光という浪花節や落語の小屋もありましたわ。八千代館は大きくてね、よう行きました。

——八千代館はマキノの常設館ですね。

ええ、そうです。マキノ専属で、月形龍之介主演のばっかりやったね。よう見ましたわ。それで学校卒業してから、京都の電気店へ就職したんです。それが小僧扱い同然でつまらなくてね。辞めて戻ってきたんですわ。それから知人が金森さんに紹介してくれたんです。

——よくマキノ映画を御覧になっていたから映画界へ入りたいとおっしゃったんですか？

ええ、そうです。それで金森万象さんの書生として、金森さんの家に同居しましたのや。約半月ほどしてから、「やっぱりここに書生として居てもいかんから、正式にマキノ撮影所の監督部へ入るようには手続きする」と金森さんが言って、一緒にマキノ省三さんに撮影所へ会いに行ったんです。それで省三さんが「それやったらよろしい」と。「採用する」ということで書生やめて、監督部の助監督として採用されたわけですね。18(歳)の後半くらいやと思ひまんのや。学校を卒業してね。そのとき給与は25円でしたわ。

——助監督の給料で？それは高いんじゃないですか。

いやー、その時分はね、監督なんかはね、かなり給料貰うてましたで。助監督として入った初任給が25円でしたわ。

——入ったのは、御室の撮影所ですよ？

ええ。あの当時はね、月形龍之介さんがいました。月形さんはもう花形でやってはりましたね。すでに阪東妻三郎さんは、妻プロダクションで独立してはりましたわ。まだ(市川)右太衛門も(片岡)千恵蔵もおられませんでしたわ。私が助監督した時分に、(嵐)寛寿郎さんが入って、それから、かなり遅うに、千恵蔵さんが入られたんと違いますか。寛寿郎さんはね、嵐長三郎さんという名前で会社入られたんですわ。市川右太衛門さんは、市川右一という名前やったんですわ。

『(探偵綺譚)文明の復讐』の撮影の最後の時分に(撮影現場に)居ったと思うわ。正式にはマキノの助監督とは違って、書生時代に見に行きましたわ。夜間(撮影)やりましたやろ、(セットが)大がかりやったね、だから有名やったで。「文明の復讐」が済んでから、マキノ省三さんに紹介してもらって、助監督として採用されたわけですわ。私はだいたい金森さんの専属(助監督)でしたわ。一番最初に『祇園情話(春雨草紙 千代香の巻)』でしたな。マキノ正博さんに都賀静子さん。そのときに初めて「管家喜三郎」が、「管家紅葉」として名前貰うて、それでタイトルに出たわけでんな。「喜三郎という名前な、助監督として紅葉という名前にしたる」て、金森万象さんから頂きましたんや。これを撮るるときはね、京都の円山公園と、清水さん(清水寺)とこ行きましたな。清水さん撮影するときには、もう夜中のうちに、監督さんとか撮影技師と山の上、あがって、それで下には私が居ましたんや。旗でもって、指図しまして撮影したわけですな。あの時分はね、(警察に)未届けか何かで(笑)、公にできへんから、朝早うに山、あがってしもうたんやな。今こそね、許可貰わんといけないけども。

2. 金森組について

「文明の復讐」より前に、高木新平さんが、神戸でビルとビルの間を飛んで撮影して、一躍金森さんが、活劇篇の監督として有名になったわけやな。私はそのとき居まへんけれども、「管家君、こんな話があった」ということ、金森さんから聞いてまんのや。金森さんはね、フィルムの整理(編集)しますやろ?それで



『祇園情話 春雨草紙 千代香の巻』八瀬ロケ・スナップ。左より、管家紅葉、マキノ正唯、金森万象、都賀静子提供:管家紅葉氏

“追っかけ”がおまん。悪者が逃げる、ゴロ追いますな、そのときに、フィルム、パッパッパッとしはる、そのカットバックが、ものすごい上手やった。

沼田紅緑さんと金森万象さんが親友でね。二川文太郎さん、井上金太郎さん、それから金森万象、これが三羽鳥やったんです。金森万象さんは、だいたい活劇篇の監督をしてましたね。井上金太郎さんは、喜劇をやってはりましたな。秋篠珊次郎、これ井上金太郎さんの変わりの名前(筆名)やな。一寸この人、面白い人やった。二川文太郎さんは、まあ、艶物語とか『雄呂血』(1925)とかそういうのを担当してはりました。もうすぐく、井上さんやとか、二川さん、寿々喜多(呂九平)さん、四人が非常に仲が良かったんやな。「万ちゃん」、「金ちゃん」、「文ちゃん」という風な間柄やったんやな。私もそういう仲の金森さんの助監督やから、撮影所行っても、はたの監督から、ちょっと受けが良かったんやな。一回か二回はね、二川文太郎さんが監督をやったときに助監督したことがおまんねん。そのシャシン、今でもあると思いますわ。

——金森万象監督は寿々喜多呂九平さんとコンビが多かったですね。

ああ、もう多かったね。金森さんと寿々喜多呂九平さんとはね、ものすごい仲が良かったな。寿々喜

多呂九平さんは大したもんやったねえ、私が入ったときには。頭良かってんな。脚本にね、ちゃんと絵も付いたったわ、肝心なとこね。『矢倉』とか『狼火』やとねえ、立ち廻りんとこ、ちゃんと漫画みたいに絵描いてあんねん。絵も上手や。

——金森さんは寿々喜多さんの指示通りのカットを撮っていたんですか？

金森さんは、あくまでも、寿々喜多さんの脚本を尊重してましたな。大体、それ(寿々喜多の絵)に似たような、演技はしてました。だから大したもんや、この人(寿々喜多)は。西条照太郎さんあつたね？あの人(13)は字幕が多かったな。そういう非難があつたな。

——金森監督は寿々喜多呂九平さんの隣にお住まいだったんですね。

いや、最初は違いました。小松原って駅の近所にね、長屋で二階建ちの家あって、ススキ(寿々喜多)さんが入られて、後から隣の長屋の二階に金森さん入ったんや。そのときは私は別居してました。(後に)金森万象さんは、京都の有栖川町に一人で住んでましたわ。私、会いに行ったことおまんねん。金森さんはね、あの人(14)は、実家は嵐山で、土産物屋やってましたな。

——カメラマンの石野誠三さん(14)ともコンビでしたね。

そうそう。カメラマンと監督さんは、一心同体にならあかん。野球でゆうたら、ピッチャーとキャッチみたいなもんやね。息のおうた人やないと、やっぱり上手いこといきまへんな。そういう点では、金森さんは、石野さんと一生コンビやったね。金森さんと石野さんやっぱりよう、馬がおうててんな。途中で交代になったか知らんけどね。私はほとんど石野さん(と撮影一緒)やったわ。せやから誰より、石野さんに物凄いかわいがってもらいましたわ。中々ええ人(15)やったしね。山崎一雄さん(16)、壇(常夫)さんが撮影助手やった。あの人(石野誠三)は一寸派手な人で、一寸変わった服着てはりましたな。あの時分、玉突きしてはったん。名人やったね。ええ男やった。面白い、愉快な人。世話好きやね。せやからこういうもん(「マキノ旧友会」)出来たんやな。あの人(17)おらへんたら、もう出来まへんわ。松浦(茂)さんも、石野さんの後で金森さんにつかはったわ。

II. 助監督の仕事

1. 映画製作過程

台本でけたら10冊はコピーせないけまへん。油紙引いて、書きますのや、監督部屋で。撮影技師、主演、衣装方、鬘、大道具、小道具にホンをコピーして、渡しますのや。時代劇やったら鬘おまっしゃろ？女優やったら、女優の鬘形の系統おまっしゃろ。それから衣装、見なきやいかんがな。小道具見せな。そんなん皆、ホン渡さんといかんわな。でけたら、ホン読みしまっしゃろ、ホン読み済んだら、衣装部屋(は)衣装合わせ。鬘は、主演と女の人やったら鬘合わせして、(サイズが)あかなんだら、誂えせないかん、主演の俳優と打ち合わせします。他の俳優はヅラ、オーダーせんでええねや。主演の人は、鬘、衣装、皆別注や。

ロケーションは、人の整理がエライがな。マキノの常設館の無料入場券、ロケーション行くときに貰えまんねん。「こういう事情で」って言って、50枚なら50枚、助監督が持って行きますねん。そして撮影のときにね、人がよう来ますやろ？「邪魔になるよつてに。この券やるよつてに退いてんか」言うて、券で人の整理をしますねん。助監督はそんなでロケーションは忙しかった。俳優も連れていかならんし、交通整理もせなきやいかんし。セットは楽やねん。大道具も小道具もライトマンやら、いはるもん。ところがロケーション行くとね、かなり雑音が多いもんでね、もう助監督は忙し。人が少なかったんで、何もかもやらないかんもん。許可は簡単にもらえるけども、一応はやっぱり警察に届けもしなきやいかん。ロケーションの時は会計もやりまんのや。なんぼかお金預かって(笑)。

——「佐平次捕物帖」シリーズは人気がありましたね。

「佐平次捕物帖」(シリーズ)はやね、この人(18)ろっぺい(呂九平)さんの十八番で。カメラが自動車の上からエキストラを、俯瞰撮影でやりまっしゃろ？捕手が追いかけてくる、本人がズーッと下がってくる、そうすると自動車がズーッと(引いて)行く。捕手が十手持っておっかけてくるときにね、大勢の人や

から、せんど(何度も)撮影助手の江原義夫⁽¹⁸⁾と二人で、役者の代わりに(捕手の)中入って、エキストラ動かして指導しまんねや。エラかった。それで(自分達も)扮装しまんねや。扮装せなんだらシャシン写ったとき格好悪いもん。「お前が入ってやれー！」てなもんや。(笑)

——夜間撮影は、だいたい御室撮影所の中でされるわけですよね。

うん、セットのときの夜間撮影もあるし、オープンときは、たいてい夜間撮影やな。「四谷怪談」のときどか、全部夜間撮影や。相当費用が要るのと違いますか、オープンは。

——夜間撮影は、照明も含めて事前の準備は大変でしたか？

大道具さんがやるのと違いますか。「四谷怪談」の“戸板流れ”の川あってね、あんなのは皆、大道具さんがやりましたな。大道具さんは、また忙しいんで。あの時分はカーボンやった、カーボンでバッテリーと写った。せやから、直、目やられてしまうねん。俳優さんでも直、眼鏡かけるやろ？皆、夜間撮影するたびに、朝、目真っ赤になってたもん。ものすごいきついもん。エライこっちゃ、夜間撮影は(笑)。

——その当時の編集は？

編集はね、私やとか、石野さん、金森さん、撮影助手と四人でやまんねん。だいぶ編集しますがな。金森さん、(フィルム)見てますやろ、石野さんも私も見てますわ。それで、切るモン、切る。で、俳優さんいかんよってにNG、おまっしゃろ？それは、石野さんと金森さん、話し合いしてやりますがな。とにか



『佐平次捕物帖の内第五篇 謎 後篇』草津ロケ。左より、金森万象、小岩井昇三郎、近藤伊与吉、管家紅葉、江原義夫、石野誠三(カメラ) 提供:管家紅葉氏

く監督と技師によってフィルムを、整理しまんねん。アミールとかアセトンという薬で、つなぎまんがな。徹夜多かったなあ。

——『砂絵呪縛』も短期間に徹夜で仕上げたそうですね。

そうです。新聞の連載小説やろ？それを山上(伊太郎)⁽¹⁹⁾さんが脚色しはって、ロケは仁和寺ですわ。これは何篇もあったねえ、監督さんも皆、違いまんな。各社競映やもん。こういうもんは監督泣かせやで。上映日が決まってるからね。昼、撮影しに行きますやろ、そしたら昼の分を直ぐに現像して、現像している間に帰ってきて、セットの撮影しますわな、セット済んでから、また夜通しで現像出来たヤツ(フィルム)を編集します。フィルム、ネガからしまんな。昼の撮影が少なかったらええけどね、多かったら一寸いかな。ロケーション行って曇やったら中止や。太陽が出てきたらやるけれども。なんぼも出来まへんで。

シャシン出来たら、字幕タイトルおますやろ？助監督が、脚本の中から(字幕部分を)抜粋して書いて、字幕部へ出さないかん。で、字幕部はそれに基づいて、紙で書いてくる。字幕出来たら、字幕部屋で撮影せないかん。岡本一鳳さん⁽²⁰⁾やらもおましたし、鈴木影一郎⁽²¹⁾もおました。私らいたときに仲間やった。「でけたか？」「おう！でけてんで」てなもんだ。「ほなでけたら撮影するわ」「いつえ？」「ほな、いついつしよか」「ほな、まとめといてくれ」てなもんや。そんでまとめといてもうて、一遍写して。助監督と撮影技



『砂絵呪縛』仁和寺ロケ・スナップ。左より、石野誠三、金森万象、管家紅葉(鈴木⁽²⁰⁾の左隣)、鈴木澄子、中根龍太郎 提供:管家紅葉氏

師と、二人でやりますのや。もう、パツパツパツと撮って、助監督(字幕を)読みますのや。読む間、技師(カメラを)シャーっと回して(撮影する)。暇暇にやんねやもん。タイトル(部)はタイトル撮影ばかりします。そんな難しいことないもん。バアーツと出まんがな、エムピー(M-Picture)みたいなもの(笑)。

——字幕の背景に、絵や映像が映っていたりする場合も？

そんなんは別におまんねや、それやるグループが。



映画の頭に提示されるマキノ映画のマーク

2. 難しさと楽しみ

助監督はあらゆる面において、交際が難しい。一番大事な悩みやね。大道具部屋にも皆、好かないかんわ。まあ、大道具はセット組むだけや。出来たら、監督見に来よるわな。「ここのセットやったら、前は誰々がやった残りや」「これはうちのんで間に合うな」と思うたら出来まっしゃろ。大道具はあんまり関係おまへんけど、小道具はうるさい。時代によってみな違いまっしゃろ、「こんな小道具いる」とか、色々注文おまんがな。撮影行くのに、間に合わないもん拵えてもらわんといかんやろ。無かったらチャーターするけども、ある物は、嫌われたら上手いこと順序よく貰われへんがな。監督に怒られるがな。せやから小道具あたりは、大事にせないかん。

夜鷹のことと、瓦版のことだね、「笑われた、恥かいた」っていうことがおまんねん。「管家君、明日撮影はこういうようなのにせよ」。ホン見ると、川端があって、夜鷹が出てくるわな？私、夜鷹が何持って出よんのや、全然わからんのや。もう一つは等持院

の撮影所で、大道芸人がちょっと練習してまんねん。そしたら、「瓦版！」。ほな瓦版て何やわからんわ(笑)。「管家君、瓦版というのはこういうもんや」「夜鷹は、筵持って出るよってに」て教えて(もらって)。

一瞬でも撮影暇やったら、小道具行って、色々世間の話したり、よう教えてもらいに行かんならん。憎まれたら、教えてもらわれしまへんやん。タイトルいうたかて、「こんなん書いてんか。早くよって、はよして」「今いうても忙しい！」て言われてしまうがな。好かれたら、はよ書いてくれるわな。カメラマンも大事にせないかん。カメラマンは助手一人でっしゃろ？撮影技師はきちんとレンズ見とる。撮影する場面によって、(レンズ)一所懸命見ててやねえ、立ち廻りやったときは、助手が(クランク)回さないかんわ。手回しやもん！せやから監督助手が、レフ板を持つ作業もやたらないかん。とにかく、助監督いう仕事は、最も頭使うて、うるさい。監督の言うこときかないかんし。俳優さんのご機嫌も伺わないかんし、照明の援助もせないかんし、そら難しい仕事や。ありとあらゆる人のご機嫌伺いに行くような。せやから途中で、辞める人も多い(笑)。

若いとき、撮影所時代は面白かったね。良かったですわ。面白い話するんやないけどね、女優さんでマキノ輝子⁽²²⁾さんや大林(梅子)⁽²³⁾さんや松浦築枝⁽²⁴⁾さんやとか幹部の人は、全部個室や。女中(役)やとか仕出しやとかは大部屋におまん？他のモンは、自由に入れませんでしたけど、監督部の助監督はね、女優さんの大部屋へ自由に入れまんねん。そやから、雨降って撮影休みでおまっしゃろ？そうするとお遊びに(行く)。阿呆な話したり、楽しかったねえ。

Ⅲ. ロケーションでのエピソード

1. 京都

ロケーション・ハンティングは、主演の偉い人、監督さん、撮影技師、撮影助手と一緒にいきますわ。「簡単な茶店のセット組んでくれ」ということを(打ち合わせ)でけたら、大道具へ頼んで組んでもらう。上鳥羽方面、鳥羽の堤防でようやりましたがな。障

害物少なかったわ。時代劇ではもってこいだっただもんね。『返り討以上』は、鳥羽ですわ。

——『仇討世相録』も鳥羽で撮影されたそうですね。

伏見に方除けの神さま(城南宮)、おまんね？その前にね、有名なおせき餅屋がおまんねん。おせき茶屋いうて、国道1号線出来る前には上鳥羽の方やった。ここら方面撮影したときに、そこで休憩してたん。

——大原でもロケされましたよね。

大原はね、よう行きましたかな。『青春』も大原や。「恋と若武者」(『青春』の公開前題名)やと思えます。大原三千院の真ん前に、茶店兼、色紙や短冊を売っているお店があって、ロケーションへ行ったときは、石野さん達とそこへよう寄りましたわ。徳子さんという人がやってましてね。有名でしたわ。

『矢矧』か『狼火』でねえ、保津川下り途中で舟上がってロケーションした。『矢矧』は京都の木津川でやりましたわ。橋の上から撮影してね。夏の暑い時分で苦労した。オーバーラップとかおましたな。「謎」(『佐平次捕物帖の内第五篇 謎 後篇』)は山陰線の八木に園部の方、ようロケに行きました。

2. 江州(滋賀)

『(江戸巷説)女怪』は瀬田の唐橋行ったことおますわ。橋の東詰めにね、「あみ定」ていう料理屋があったんや。鈴木澄子⁽²⁵⁾さんが立ち回りしてね、橋から河へ、はまりまんのや。離れてるときには、吹き替えして、岸上ってるときは、アップで。鈴木さんが岸上ってくると「あみ定」さんの前で撮影したんです。道具(方)皆、御飯よばれて休憩しました。衣装の着替えとか、世話なりましたんや。あのとき(助監督時代の瀬田ロケでの休憩は)全部あこでした。未だに記憶ありますわ。吹き替えは大部屋男優が、捕手やとか道歩いたり、皆色々しましたわ。今の彦根城の堀端で立ち回りして、はまりまっしゃろ、それも全部男や。立ち回りするときは、いつも大部屋の役者がはまりまんがな。その代わり、はまったらコレが付きまんがな、“はまり料”(笑)。せやから“はまり専属”ちゅうのはおまへんで。

『松平長七郎』の船おましたな？(広告の)絵に



『青春』八瀬ロケ・スナップ。左より、1人おいて嵐長三郎(後の嵐寛寿郎)、管家紅葉、石野誠三、金森万象、不明 提供:管家紅葉氏



『松平長七郎』近江瀬田ロケ。左より、山本九一郎カメラ助手、金森万象、(1人おいて手前)管家紅葉。右より二人目の白襪俳優は西郷昇 提供:管家紅葉氏

なったけども。これ、近江瀬田川、瀬田の唐橋の「あみ定」か、あの辺で撮ってます。その時分はね、監督と大道具さんと打ち合わせてやったん違いまっか。オランダ船を写したかったん違いまっか。船が撮影の後に潰れてしもたわけや。『天明果報談』は昔、陸軍の演習場やった、今津の饗庭野^{アイバノ}っていう所ですわ。

3. 信州

——『狼火』では、何百頭もの馬を使い大ロケをしたという記録があります。

飯田で馬、都合しましたんや。馬(の撮影)やるときに、テント張りで休憩するのや。信州のね、日本アルプスおますでしょ、大正池。松本からね、トロッコで上がったんや。白樺が川から上がっていて、ものすごい綺麗やったな。えらい櫓(イントレ用)組んで俯瞰撮影(した)。天竜川でも、マキノ正博さん一

人で座って笛吹いてる感じ(のシーンを撮った)。ロケーション費用かかってまんねや。金、足らなから、中部(マキノ中部撮影所)へ電話かけて持ってきてもらて、帰ってきてん。芝居(撮影)先撮りやろ、ほんなことおましたで。



『狼火』上は、松本からのトロッコ。右より、津村博、金森万象、管家紅葉(メガホン)、マキノ正唯。下は、飯田ロケ。前列左より、松浦康雄スチル、金森万象、津賀静子、石野誠三、津村博、マキノ正唯、松村清次郎小道具。後列左より山崎一雄、管家紅葉。提供:管家紅葉氏

4. 高松から岡山へ

武井龍三⁽²⁶⁾さんは馴染み深かった。『剣は鳴る(前篇)』で「文六」という不細工な男になってはったんや。四国、ロケ行ったわ。

——舞台が高松らしいのですが。

そうそう。行って…寛寿郎さんも別の撮影で、一緒に四国行ったことあるな。「文六」の時分かな。高松行って岡山へ上陸して、映画館の招待で挨拶。その時分は映画館で俳優の舞台説明があったら、ものすごいお客が来てくれるから、「折角高松へ来てるのやったら、岡山へ来て、うちの常設館で、挨拶してほしい」という願いがあって。

——挨拶のためではなくロケがあったから、寄れた

ということですか。

そうそう。費用は何もかも、常設館の館主がくれた。そのときは大したもんでした。岡山の駅着いたら、オープンカーで来て、街まわる。そうして常設館入って、俳優とか監督さん、撮影や美術、主なモンだけ舞台挨拶したんです。そりゃもう天皇陛下みたいなもんやった、本当に(笑)。

IV. マキノ御室撮影所の人々

1. 御大・マキノ省三

マキノ省三さんは、(撮影所に)毎日見に来てはった。熱心やった。そやからもうやかましい。指導力がエライのかもわからんけど、厳しかったね。「そんなのは違う」言うからね。そやから必ず自分が出てせんことには、納得しないと違えますか。どない映画でも「総指揮マキノ省三」て出てますな。

——それはマキノ省三さんが、実際に「総指揮」とクレジットされるだけの指導力をその作品に持っていたということなのでしょうか。

ああ、勿論そうですわね。とにかく全部管轄やったね。あの人の存在は大きかったね。大したもんでした。だいたいどのシャシンでも、主演は御大が決めはんねん。端役は監督が決めます。このシャシンは誰が主演、誰が助演、もうちゃんど決ってた。上から降りてくる。金森さんはね、片岡千恵蔵さんが多かったんやな、千恵蔵さんに、正博さん、それから大谷友三郎⁽²⁷⁾さん。あれが多かったね。

——監督とスターとの相性のようなものがあつたんでしょうか。

いや、それはね、合うか合わないかはそれは知りませんけどね。それはまたマキノ省三さんが指示したのと違えますか。

一本撮影しますやろ、それが出来たら試写会っていうのがありますわな。京都の千本に、マキノの専属館があつてん。そこで、一般の上映が終わってから遅うに。マキノの御大も来はりまんがな。それで(作品を)観て、大部屋の女優、一寸した端役の芝居が上手やったら、御大が、「あの娘芝居上手やな、何ていう役者やな」と。それで監督が「あれは…」と。

そしたらメモシはるがな。そうしたら、企画が出てきますやろ、そしたら「あの娘使うてやったらどうや」というようなので、まあ下の役者の出世の糸口というわけですな。それで段々上に上がってきますわ。大部屋の人もやっぱり一層熱心になりよる。大部屋の連中でも、そういうチャンスがあるわけだんな。

マキノ省三さん監督のときは、必ず松田定次さん⁽²⁸⁾が、カメラマンやったわ。縁故関係があると思えますわ、マキノ省三さんと松田さん。知りまへんけど、一寸聞いてんのはそんなことやね。せやから松田さん、大人しい人でした。冗談絶対言わはらへん。もう真面目なね。ほんまにもう、堅苦しいちゅうか、あんまり人の付き合いも少ないしね。そういう人でしたな、松田さんは。松浦築枝さんという人がいましたな、あの人と松田さんが結婚されたんやな。



『元和豪侠传』八瀬口ケ。左より、管家紅葉、品川スチール、不明、金森万象、岡島艶子、澤田敬之助、滝川紅二、松浦茂 提供：管家紅葉氏

2. 関わった俳優たち

私はだいたい担当しておったのは、マキノ正博さんが多かったね。女優さんでは鈴木澄子さん、多かった。マキノ正博さんは私より一つ歳上やった。『祇園情話(春雨草紙 千代香の巻)』撮影したときに、私が18(歳)で、あの人、19ぐらいやったね。面白いお方でしたな。人を大事にしてくれましたね。ええ人やったわ。一緒にお化粧みたいなのして撮影所遊んでましたりしてな。愛想も良かったし、もう皆から慕われて。俳優としても仕事熱心でしたわ。芝居上手でね。あの方はだいたい申年やから(笑)、ものすごい器用や。そやから監督やってはったけど、

振りは自分でやってはった。演技のやり方上手でしたな。お父さんから譲り受けたか知らんけども、役者としても良かったけど監督としても良かったね。そやけど、俳優よりも監督の方が適当な人やったね。——マキノ正博さんやマキノ省三さん、ご家族と個人的な交流はおありでしたか。

いや、正博さんと別に個人的な付き合いはなかった。撮影してるときは何やかや話しますけど、私は助手やし、あの方は御大の息子さんやもん。あの方が監督になってからはあんまり付き合いはなかったなあ。

その時分、マキノ智子(輝子)さん主演でね、お父さんが監督してはりましたわ。『お洒落狂女』(1926、マキノ省三)、ああいう映画やってはりましたわ。いつも、月形さんと共演してはった。私が入る前から共演やったなあ。(二人の仲の)噂がでてからね、月形さん出る番、昼でたら、マキノ輝子さんが昼でるってことは、ちょっとシャットアウトやったなあ。マキノ輝子さんが昼やったら、月形さん、晩という具合にやってはった。そりやあな、やっぱり若いうちは一緒に共演すればやっぱり情が移りまんがな。そやからやっぱりそういう人が多い。撮影所のなかには。

(嵐)寛寿郎さんとはね、一回か二回ぐらいは一緒でしたな。寛寿郎さんは沼田紅緑さん、多かったと違いますか。寛寿郎さんは、芝居が派手や。「鞍馬天狗」(初作は『鞍馬天狗異聞 角兵衛獅子』1927、曾根純三)だとか。ところが、千恵蔵さんは『万花地獄』(全五篇、1927-28、中島宝三他)みたいなんしてはったやろ。芝居が渋いわな。人気はやっぱそれで、寛寿郎さんののが上やったな。常に寛寿郎さんと千恵蔵さん⁽²⁹⁾はやっぱ、ライバル同士やったな。嵐冠三郎⁽³⁰⁾さんは俳優であって、俳優の幹事してはってん。北岡よし江⁽³¹⁾の父親やった。あの方もあったね、高木新平さん。奥さんが生野初子⁽³²⁾でした。新平さんが独立してね、京都の吉田山、あこで撮影所⁽³²⁾を持ってはったと思いますねん。その高木新平さんの撮影も、金森さんがやってはったわ。

天野刃一⁽³³⁾さんは、市川右太衛門さんが撮影所つくったときに、右太衛門さんが引き抜いて。この人、

敵(役)、上手いねん。奈良のあやめ(池)、いうのおまんな？あこに右太衛門プロダクション⁽³⁴⁾こしらえはったんです。千恵蔵さんは御室撮影所の付近やったもんね、千恵プロ⁽³⁵⁾。竜安寺の駅の側に玉突きがあって、そこに、岡島艶子さんの家あったと思うわ。ご主人は監督さん(仁科熊彦)やった。

阪東三右衛門さん⁽³⁷⁾も入っておられて、名前出んうちにやめてしまはったらしい。やっぱりマキノ省三さんが引っ張っていかはったん違いまっか。あんまり人気悪かったな。それに実川芦雁⁽³⁸⁾がおった。あれも切ってまいよった。阪東三右衛門は、芝居下手や。見た目、体細かったしなあ。顔も細い。口綿一杯入れとった。そんな役者やった。大谷友三郎さんも割りに人気出なかつたね。あとで入ってきた人や、マキノ生え抜きと違いまんがな。友三郎さんとよう一緒に撮影しましたわ。ほとんど金森さんとやった、大谷友三郎さんは。大谷友三郎さんは、弟子さん付いてはった。俳優のね。それでロケーション・ハンティングのときには、弟子連れて歩いてはった。他の人はそんなのおらん。せやから二人分、段取りせないかんがな(笑)。

マキノ登六さん⁽³⁹⁾はね、殺陣師やった。林正美さん、後からマキノの名前貰うてね、マキノ正美⁽⁴⁰⁾になりました。(マキノ青年)五人組はね、マキノ正博⁽⁴¹⁾さんでっしゃろ、それからマキノ潔⁽⁴¹⁾な、それからマキノ正美さん、マキノ登六さん、それからマキノ梅太郎⁽⁴²⁾さん、この五人やと思うなあ。

3. 助監督仲間

助監督は、専属の助監督とフリーの助監督があったん。この当時はね、マキノ省三さんには松田さんが助監督やってん。で、二川文太郎さんには、稲葉蛟児⁽⁴³⁾さんやってん。それで金森万象さんには私が付いてましてん。

山中貞雄⁽⁴⁴⁾さんは、私が助監督やってたときは社堂沙汰夫さん⁽⁴⁴⁾ていってました。(後に)新聞で(山中貞雄という)名前も死も知りましてん。山中貞雄さんは“むつつり”やったなあ。親しうしてたけども、冗談とかそんなのあまり話ししまへなんだなあ。それから一番親しかったのは、萩原陣太郎⁽⁴⁵⁾さん。萩原遼とし

て東映かどっかで監督してるはずですわ。東映の撮影所になって面会に行ったことおまんねん。それにね、二川文太郎さんの弟⁽⁴⁶⁾さんで、滝沢英輔⁽⁴⁶⁾さんは、俳優として私、交流してましたな。後に監督なされたけどね。それからね、並木鏡太郎⁽⁴⁷⁾さんていう人もおられた。この人、性格が違う(笑)。あんまり付合いしまへんわ。並鏡さん、それからもう一人、杉本九一郎⁽⁴⁸⁾さん、沼田さんの助監督でした。杉本九一郎さん、一緒やったなあ。エライ友達やった。杉本九一郎、それから私、萩原陣太郎、社堂沙汰夫、これがものすごい仲良かった。「シャダやん、シャダやん」て。それで萩原遼⁽⁴⁸⁾さんは、「おい、陣やん、陣やん」ていうもんや(笑)。それからここ(大阪門真市)に私、戻ってからでも、杉本九一郎さんよう家、来はったん。マキノやめてから杉本九一郎さんが、葬式屋に勤めていて、何回も来ましたがな。九一郎⁽⁴⁸⁾さんが、わてらでは一番“偉いさん”や(笑)。家も撮影所の近所やった。竜安寺の停留所の裏やった。鈴木澄子⁽⁴⁷⁾さんの家と並んではった。



稲葉蛟児と管家紅葉 提供:管家紅葉氏

4. 裏方

——当時マキノにいらした河合広始⁽⁴⁹⁾さん⁽⁴⁹⁾はご存じですか。

河合さんは大道具かどっかと違いますか。大道具でもう一人、居はったなあ。松村(清次郎⁽⁵⁰⁾)さんか。松村さんは小道具やったかなあ。松村さんはよう知ってますわ。年配やったね、松村さんは。(撮影所の)なかに、ちゃんと小道具部屋おまんがな。ほとんど、小道具なんか揃うてましたな。衣装も、衣装部屋がちゃんと置いたった。大概もう衣装は衣装部

屋、鬘は鬘部屋があって。主演は鬘屋が鬘、別に
 誂えてくれるけども、普通のヤツは鬘部ってあった。
 あんまり他所から借りていなかったな。これにね、大
 海(源太郎)⁽⁵¹⁾さんね。この人、照明係の主任さんや。
 この人も心安かった。藤林甲⁽⁵²⁾さんは大海さんの弟
 子で親切でしたわ。(藤林さんは)東京かどっかい
 かはったなあ。ええ撮影所へ行かはったはずやわ。
 そんなことちょっと便りがありました。

都村健⁽⁵³⁾さんは、マキノの雑誌社や、編集者や。
 『マキノ映画』という雑誌が出まんのや、毎月。なか
 なか熱心やったわ。よく撮影所来てはったもん。金
 森さんやとか井上さんやとか、心安かったで。都村
 健さんは、出来た雑誌持ってきはりますやろ、それ
 で、やっぱり見たいがな。どんなのが出るか分か
 らんもん。文句も書いてあるし。「都村さん私もひとつ
 貰いま」言うて。仲良うしてな貰われへん。

——他にはどういいう裏方さんがいらっしやいましたか。

西郷(昇)⁽⁵⁴⁾さんは、馬方さんもやってて、自分も俳
 優に出てはった。

——乗馬シーン専門ですか。

普通の俳優として出てはりましたわ。吹き替えの
 ときには、西郷さん、(馬に)乗ってましたな。馬が
 要るときは、斡旋してくれますわ。高岡(昌嗣)⁽⁵⁵⁾さん
 も子役で出てました。お父さんが西郷昇さんで。こ
 れ馬方の、親子繋がりや。(馬は)西郷さんがどっ
 かに預けてはったな。高岡さんは(馬方に)なった
 のは、マキノ正博さんが所長の時分。八瀬大原(京
 都市左京区)の馬(を使ったロケ)おまんだな？あ
 れやとか、「謎」(『佐平次捕物帖の内第五篇 謎
 後篇』)のとき、京都の綾部(京都府福知山盆地)の
 方でも馬使うたことおまんがな。そのときも西郷さん
 が現場へ馬連れて来てくれはってん。今こそ自動
 車で運ぶけどね、あの時分はどないして馬運んだ
 のか知りまへんのや。せやけど、ちゃんと現場で馬
 居てましたわ。東映の時分になったら高岡昌嗣さん
 が、馬持って東映(京都撮影所)の近所で牧場や
 ったわ。馬、置いてあった。

——ロケ写真(『マキノプロダクション』1928年7月
 号)に大海自動車屋と説明がありますが。

大海さんは自動車屋さんや。貸し自動車や、マ



『佐平次捕物帖の内第五篇 謎 後篇』八木ロケ。前列右
 より、金子新、新見映郎、自動車屋。中列左より、自動
 車屋、小岩井昇三郎、管家紅葉、山本緑葉、不明、金森
 万象。後列左より、江原義夫助手、石野誠三、不明、滝
 川紅二助監督、以下自動車屋 提供：管家紅葉氏

キノの。

——マキノ撮影所所員としてですか。

いやいや別で、それを専属みたいに借りてるわ
 けや。大海さんは、他の一般の仕事もしてはった。
 せやけど撮影所へ行くときは大体その前日に、「何
 本要るのや」てここ(大海自動車)から聞きにくる。そ
 したら事務や総務の方で「明日どこの組が何台要
 る」と言いますやろ、それで段取りしてくれるわけや。
 ——自動車屋は太秦界限にあるんですか。

近所にあつたんと違いまっか。撮影所の近所に。
 私ら居たときはもう専属の自動車屋で、観光バスみ
 たいなもの(ロケバス)も皆ここから雇うてました。「明
 日6時に行くよつてに」と言うのと、その前にちゃんと
 (自動車)来てくれはるわ。カメラマン(技師)やっ
 たらええ車に乗るけども、大部屋のモンとか道具方
 は皆ガタガタ(の自動車)で(笑)。

——移動撮影のときなど、カメラを載せて大海自
 動車の運転手が運転するのですか。

いやいや、普通に歩くシーンなんかは、車じゃと
 っても速いから、皆で後ろから押すんですわ。キャ
 メラ助手や私やら大部屋(俳優)や、皆でや。

——追っかけシーンの場合は？

速いときは運転しますな。当時はオープンカー
 やから。ロケ地へその車で行って、それがカメラ乗
 せて撮影するわけや。

——撮影所に千本組の方はいらしてましたか。

笹井栄次郎⁽⁵⁶⁾さんは、千本(組)の人やってん。私、

居ったときは、(既に)居られたですわ。ええ顔役や。省三さんの時代からもう、笹井さんは来てはりましたわ。毎日来てはらへんねん。自由出勤、違いまっか。ときたま顔見せはるだけで。別に何もしやはらへんけど、うろろうと来てましたわ。

V. 撮影所界隈

——当時、撮影所に全国から映画好きの人たちが集まってきて、「撮影所に入れてくれ」というようなことは度々あったのでしょうか。

撮影所には、一般の人は入れなかったね。紹介があったら入れますけどね。地方から女の人の方が来ますやろ、そうすると巧いこと言って、誘惑されて。そんなこともおました。

——撮影所所員以外の出入りはありましたか。

外部からは、うどん屋も来るし、寿司屋も来るし。うどん屋は屋台、持ってきよんのや。うどんからぜんざい何でもある。寿司(屋)は、ちゃんと桶にこさえて提げて来るわ。女優部屋や、男優部屋へ持ってきよる。せやから外に店、持っとなのやろな。ほんで金は払わんでもええねん。給料日ちゃんと集金に来はるねん。

——東亜キネマの方々とは交流はありましたか。

そんなことはあんまりしまへんな。消えてしもたなあ、東亜キネマ。嵐寛寿郎さん、居やはったな。あこ、有名な俳優仰山おったのに。羅門光三郎も、団徳磨も、原駒子もおったし。なかなか、ええ女優さん多かったん。

——撮影所同士で野球の対抗戦だとかの交流があったかと思いますが。

あ、付き合いありました。一遍、京都の円山公園に行ったんあってね。それから藤井寺の球場おまっしゃろ？あこにも一遍、行ったことあるわ。メンバー違いますねん。応援だけや。(対戦)相手は知らんな。あのときは日活やとか、東亜キネマとか、帝キネ、色々あったもんねえ。千恵蔵やらの人は関係なかった。妻さんも関係なかった。日活やとか東亜やとか帝キネやとかマキノ、そういう連中やな。

VI. マキノプロダクション終幕

マキノ(省三)さんが伊井蓉峰⁽⁶⁰⁾という俳優を呼んできて『(実録)忠臣蔵』(1928)、撮影してはったんです。その当時、名古屋の撮影所があって、そこで、“松の廊下”、“刃傷場”、を撮影にマキノさんが行かはってね。それで帰ってきてフィルムを整理してはったんです。ところがその当時は、フィルムの整理はスタンドの電気を置いてフィルムを見るんです。それで整理してつなぎ合わせる。そのときに、引火したんやな。フィルム、バツと直、燃えてしまうがな。それから病気されてそれで亡くなったんやと思いますな。

——そのときは撮影所にはいらしたんですか。

そのときは私、居ったか、ひょっとしたら徴兵検査か何かで一時(郷里に)帰ってたかも分かりませんねん。(撮影所に)帰ってきたときは向う(マキノ省三)逝ってしまった。葬式のときは私、行かなかったわ。その前に、“目玉の松っちゃん”の葬式がありましたな。あれはマキノ省三さんの前やったな、尾上松之助⁽⁶¹⁾の葬式。大將軍の撮影所でしたな。北野さんを一寸行ったところ。

——嵐寛寿郎さんや片岡千恵蔵さんが昭和3年にマキノを退社しますよね？

ああ、そのときに、千恵蔵さんは石本秀雄⁽⁶²⁾さん、カメラマンね、引っ張ってしまはって。石本さんとか三木稔⁽⁶³⁾さんとか、ええカメラマンやったな。

——その混乱のなかで、撮影が中止になってしまったりしたとか。

ああ、そうらしいね。一時中止やったなあ。その時分に、ゴタゴタしはったんやなあ。

——『戻橋』(1929、マキノ正博)について伺えますか。

マキノ省三さんが、「ダークステージNO.2」で、初めてトーキーやったと思います。『戻橋』をここで初めて試験的に。蓄音機借りて、レコード会社行って。成功するかせんかの境目やな。それ、やらはったんや。「ダークステージNO.2」は、マキノ省三さん以外、入れへなんだ。だから撮影知らんねん。

省三さん、亡くなりましたやろ、それから一時

平和になりましたな。昭和5年の、ストライキのときは知らんわ。その前に皆もう片岡千恵蔵やとか、寛寿郎さん、出てしまっはった。残った後、マキノ正博さんが、再建しはったんと違いますか。それでマキノ正博さんが所長や。殆どもう、ええ役者いせんがな。南光明さんぐらいやったんと違いますか。松浦築枝さんは万年娘や(笑)。有名な人、皆出てしまった後や。その時分はもう居りませなんだ。これが一応会社になってしもうて、(マキノをやめてから)しばらくしてから会社やもん、あの会社なんてものは。それであと日活とか、皆バラバラに。

バラバラになってから金森さんは一時、帝産バス(帝産観光バス)の写真部へ入ってましたわ。石野誠三さんは中央競馬会(日本中央競馬会一JRA)の写真判定の部門に入ってやってましたわ。石野さんは(私が)辞めてからも、家へ遊びに来てくれたね。私は古川橋前で実家がやっていた「とり弥三」という料理旅館を継がんなんので、途中で辞めたけども。本当は辞めたくなかったんや。一人息子やったからね、しょうがない。その店もダメになって、そのあと徴用されて、私は特殊技術者やから、軍事工場で働いてましたわ。そやから終戦後は苦労しました。けれど不思議なもんですな。私は泣く泣く辞めて、苦労しましたけれど、今元気に不自由無く暮らしてて。あの頃辞めずにずっと残ってた人達は、散り散りになって生活も苦労した人が多い。あの頃の映画業界は今と違って、副業がないから大変や。今93歳で4、5年(マキノに)居っただけやけど、良かったなあ、思います。



左より、管家紅葉、瀬川与志、永井柳太郎(前)、久利富周介(後)、不明、不明 提供：管家紅葉氏

注

- (1) 月形龍之介(1902-1970)。俳優。本名：門田潔人。マキノの俳優養成所に入所後、中村末之助一座に加わり、地方巡業に出る。1922年、牧野教育映画製作所に中村東鬼蔵の名で大部屋入りし、寿々喜多呂九平によって月形龍之介に改名。初期は、阪東妻三郎の陰で端役として出演していたが、徐々に頭角を現し、妻三郎と争うほどのトップスターとなる。製作に対する野心もあり、28年、31年と独立プロダクションを設立するがいずれも1年で解散。松竹、東活、フリー時代を経て、新興キネマ、マキノトーキー、日活などに転々と籍を置き、42年から49年まで大映に在籍。後年はフリーとして『ジャコ万と鉄』(1949、谷口千吉、東宝)でのジャコ万や、同年、東横映画(のちの東映)に入社後、『殺陣師段平』(1950、マキノ正博)に主演、その存在感を発揮した。また、「水戸黄門漫遊記」シリーズの黄門役も定着し、54年から61年まで計14本に主演。日本芸術家信用組合の初代理事長も務めた。
- (2) 阪東妻三郎(1901-1953)。俳優。本名：田村傳吉。1916年片岡仁左衛門に入門後、23年マキノ教育映画製作所に入社。寿々喜多呂九平との共同生活の中で、「佐平次捕物帳」第二話『鮮血の手型』(1923、沼田紅緑)に主演し、スターダムにのし上がる。苦悩と純真さを併せ持つ新たな俳優として活躍し、それまでのスター像を塗り替えた革命児。24年に帝キネへ移るが、翌年阪東妻三郎プロダクションを設立。マキノプロと配給提携し、剣戟シーンが印象的な『雄呂血』(1923、二川文太郎)を製作。続いて翌年にはユニバーサル日本支社と提携し、阪妻立花ユニバーサル連合映画を設立するが、27年には約定解釈の相違により解約する。その後、阪妻プロは松竹、新興キネマなどの映画会社と提携、合流し、作品を世に送り出す。36年の解散後、妻三郎は日活に入社するが、42年に大映へ移り、『無法松の一生』(1943、稲垣浩)、『王将』(1948、伊藤大輔)などの作品に主演。49年からはフリーで活躍した。
- (3) 市川右太衛門(1907-1999)。俳優。本名：浅井

善之助。市川右団次門下となり、名前を市川右一とし、関西青年歌舞伎の花形として活躍。1925年、省三のスカウトにより入社。右太衛門と改名、スターとしての一步を踏み出す。得意の立廻りで他を圧倒し、美剣士スターとしての地位を築く。27年には市川右太衛門プロダクションを設立し、あやめ池に撮影所を建設。30年には、その後シリーズ物として何度も撮られることになる『旗本退屈男』第一編(古海卓二)が製作される。36年に独立プロを解散、新興キネマへ移り、42年に統合、創立された新会社、大映では、阪妻、千恵蔵、寛寿郎らと競演。49年、東横映画(のち東映)が創立された後は、大映の契約切れを待っての入社。51年には千恵蔵と共に、東映の取締役にも選任され、重役スターとなる。

(4)片岡千恵蔵(1903-1983)。俳優。本名:植木正義。1912年、片岡仁左衛門主宰の片岡少年劇に入った後、千栄蔵として大歌舞伎に出演。その後、映画界入りを希望し、27年にマキノ御室に入社、嵐寛寿郎と共にマキノを盛り立てていく。28年退社と共に片岡千恵蔵プロダクションを設立し、『険の母』(1931、稲垣浩)、『国土無双』(1932、伊丹万作)、『赤西蛸太』(1936、伊丹万作)などの秀作を放つ。37年に解散し所員ともども日活へ入社、42年には創立された大映へ。戦後の時代劇規制時期は現代劇『七つの顔』(1946、松田定次)など主演し、東横映画(後の東映)入社後は、右太衛門と共に取締役となり、重役スターとして東映の屋台骨を支えた。後年は小牧ハイランド社長に就任。

(5)嵐寛寿郎(1903-1980)。俳優。本名:高橋照一。嵐和歌太夫として女形で活躍。1927年右太衛門の後釜としてマキノに入社し、『鞍馬天狗異聞角兵衛獅子』(1927、曾根純三)に主演。1年間で28作品に出演、片岡千恵蔵と共に人気を博す。独立プロを起すが、日本映画プロダクション連盟の瓦解により、1年も経たないうちに解散。29年に東亜キネマへ入社、「右門捕物帖」シリーズで人気を博す。31年には第二次嵐寛寿郎プロダクションを設立し、山中貞雄、並木鏡太郎監督ら

と共に、名作を放つ。37年に解散後、38年日活へ入社し、阪妻、千恵蔵と共に、御三家としてもはやされた。

(6)マキノ正博(1908-1993)。監督。本名:牧野正唯。マキノ省三の長男。父、マキノ省三に映画人として厳しく育てられた。子役として出演を始め、後には監督として名作を生み出す。マキノ映画を表になり陰になり支えた人物。省三の死後マキノプロ解散、正映マキノを設立するが、経営困難であえなく離散。自身は借金を背負い、日活、東京映音、嵐寛プロを経て、1935年マキノトーキーを創立するが経営不振により37年に日活復社。41年には東宝へ、44年に転じた松竹では撮影所所長を兼任。48年以降はフリーで活躍した。改名遍歴は、正唯→雅弘→雅裕→雅広。

(7)都賀静子(1912-没年不明)。俳優。本名:須永静子。舞台俳優から映画に転じ、マキノ御室や宝塚キネマでの老練な演技で知られる父、都賀清司や、子役で活躍していた弟の都賀一司と一家で作品に出演。幼少期より父について子役で舞台に立ち、国活や松竹蒲田でも子役として出演。1924年にマキノ等持院に父と共に入社。マキノ正博、東郷久義とコンビを組んだり、中根龍太郎や近藤伊与吉とも共演した。31年マキノ御室の解散により、父と東活映画社へ転社。

(8)高木新平(1902-1967)。俳優。本名:高木慶吉。1921年、マキノの俳優養成所に入所、柳妻麗三郎に師事して演技を学び、片岡慶左衛門と名乗る。所内には、中村東鬼蔵(のち月形龍之介)もいた。23年に高木新平と改名、『怪傑鷹』(1924、二川文太郎)が人気を博し、金森監督との『闘争』(1924)で“鳥人”のニックネームが付く。それまででない、スピーディーな時代劇作品で注目を集めた。27年に高木新平プロダクションを設立、吉田山麓に撮影所を建設するが、28年にマキノに復社。

(9)沼田紅緑(1891-1927)。監督。1921年牧野教育映画に入社し、以後牧野省三と行動を共にする。寿々喜多呂九平の脚本で『鮮血の手型』を阪東妻三郎主演で監督し、続いて『討たるゝ者』

- (1924)では、阪妻人気を不動のものとした。一方、月形龍之介主演で『刃光』前後篇(1924)を監督するなど活躍はめざましく、マキノ省三の片腕として働く。27年2月、マキノ省三の応援監督として『実録忠臣蔵』(1928)の彦根での雪のロケーション撮影で風邪をひき、体調を崩して翌月逝去。
- (10) 二川文太郎(1899-1966)。監督。軍人になろうとしていたが、やがて栗原トーマスに師事して映画を学ぶ。1921年大正活映撮影所から、牧野教育映画部に、俳優として入社。その後、撮影部や脚本部、タイトル部などを経て23年に『唇気楼』を初監督。ちなみに、マキノ映画の冒頭に必ず映されるマキノのマークは、タイトル部にいた経験を生かし二川が考案したものと言われている。同時期に大正活映から移籍した井上金太郎と同じく、脚本も書き、紫之塚乙馬という筆名で作品を執筆。マキノ解散後は、松竹下加茂や、宝塚映画で時代劇を撮り続けた。
- (11) 井上金太郎(1901-1954)。監督。大正活映撮影所で栗井鏡太郎と名乗り、俳優として所属。1921年、牧野教育映画部に入社し、『一太郎やあい』(1921)や『幸福は何処より』(1922、金森万象)に主演するが、のち監督を志すようになり、マキノ省三の下で助監督を経験する。23年には初監督作品『立派な父』を世に出し、阪妻プロ設立時には『異人娘と武士』(1925)を監督し、好評を得る。秋篠珊次郎の筆名で脚本も書いた監督作が、キネマ旬報ベストテンを賑わせるなど、マキノ御室時代に活発な活動を展開。28年の月形プロ設立時には、月形龍之介と行動を共にし、作品を数多く監督する。後年は松竹に移り、20年近く作品を撮り続ける。
- (12) 寿々喜多呂九平(1899-1960)。脚本家、監督。本名：神脇満。1923年マキノ等持院入社。脚本作『鮮血の手型』(1923、沼田紅緑)で阪妻を主演にし、一躍スターにのし上げる。以後、コンビで次々と作品を発表、『雄呂血』(1925、二川文太郎)で頂点を迎える。今回談話でも話題に上がった「佐平次捕物帖」シリーズは、彼が長年書き溜めていた小説を元にしたもの。26年退社、以後は帝キネ、新興キネマ等で監督作を発表。神脇満、新妻逸平太の監督名あり。
- (13) 西条照太郎(1902-没年不明)。脚本家。本名：土屋可義。運輸会社、保険会社に勤務後、1925年に帝キネ脚本部に入社。同年マキノ等持院に移り、マキノ御室時代も引き続き活躍した。金森監督とは『正剣邪剣 前後篇』、『青春』で共に仕事をする。代表的な作品としては、『修羅八荒』(1926、マキノ省三他)、『鳴門秘帖』(1927、沼田紅緑)が挙げられる。28年に退社、独立後、月形プロ、河合プロダクションを転々とし、36年にマキノトーキー脚本部に波多憲治の名で参加。新興キネマ京都時代には、怪猫映画の脚本も手掛け、45年にフリーとなる。別名を西条章太郎や、木下藤吉としていた。後年は嵐山嵯峨どうふ「竹村」主人としての生活を送る。
- (14) 石野誠三(1905-没年不明)。撮影技師。1919年に日活関西撮影所に、技術見習い助手として入社。21年退社後、大阪サワタ映画製作所を経て24年にマキノ等持院に入社し設立とともにマキノ御室へ。一本立ちした25年の『奇傑鬼鹿毛』以後、金森監督とは長年コンビを組み、『矢矧』、『砂絵呪縛』などを担当。大森伊八や、三木稔らと共に、重要なカメラマンとして活躍。名古屋中部撮影所設立時には、現代劇部のカメラマンとして指名もされ、他プロでは阪東妻三郎主演での『雄呂血』(1925、二川文太郎)の撮影も担当。マキノ御室が解散した後は、すぐにJ.Oスタジオに転じ、編集に携わるが、41年には満映に移り、石野吉三郎の名で、作業管理所技術班長、編集係主任として終戦まで在籍した。マキノ当時は女優の水谷蘭子と夫婦だった。
- (15) 山崎一雄(1909-没年不明)。撮影助手。大阪英語専門学校卒業後、マキノ御室時代は、石野誠三の助手として活動。富沢進郎監督の『黒怪流星』(1927)の助監督も務めている。その後J.Oスタジオ(後の東宝)に入社。1941年、東宝スタジオ(東京撮影所)所属。46年新東宝、51年再度東宝に所属した。
- (16) 壇常夫(生没年不明)。撮影助手。詳細は不明

- であるが、金森監督作品では『青春』の撮影助手としての記録がある。
- (17) 松浦茂 (1898年-没年不明)。撮影技師。別名：松浦詩華留。1919年に日活関西撮影所へ入社、翌年退社し、野ヶ原飛行隊撮影課に奉職。同課辞職後の22年にマキノ等持院へ入社。金森監督を始めとして、マキノ省三、沼田紅緑、中島宝三、吉野二郎、二川文太郎など多彩な監督に付き、石野誠三、大森伊八、三木稔などの撮影技師と肩を並べた。33年からは宝塚キネマに在籍。36年には太秦発声映画株式会社(後の東宝)の編集部に在籍記録がある。
- (18) 江原義夫 (生没年不明)。撮影技師。江原義雄としての表記もあり。マキノ御室時代の詳細は不明であるが、金森監督の『隼六剣士』には撮影助手として記録がある。後は東宝に移り、『東京オリンピック』(1965、市川崑)では、編集部長、また製作本部委員会にも名を連ねている。
- (19) 山上伊太郎 (1903-1945)。脚本家。滋賀県生まれで大津市役所給士であったが、東亜キネマのシナリオ研究生となる。『帰ってきた英雄』(1926、仁科熊彦)でマキノ省三の目に留まり、マキノ御室に同年入社。『蹴合鶏』(1928、マキノ正博)、『浪人街』三部作(1928-29、マキノ正博)、『首の座』(1929、マキノ正博)などを次々と執筆、マキノ正博、撮影技師の三木稔とトリオを組んだ作品が、若者の人気を博したが、後年はスランプに見舞われる。戦時下フィリピンのルソン島で陸軍報道班員として戦死した。
- (20) 岡本一鳳 (生没年不明)。字幕部。金森監督の『祇園小唄 絵日傘 第一話』(1930)でのタイトルなどを手掛ける。詳細は不明であるが、マキノ一キー瓦解後は日活に転社しており、1941年まで日活京都タイトル部に在籍記録がある。
- (21) 鈴木影一郎 (生没年不明)。タイトル(字幕)部。学生時代の「マキノ映画」誌への投稿がきっかけで、マキノ御室美術部のタイトルマンとなり、助監督や撮影助手との交流も深かった。柏木一雄監督や稲葉蛟児監督に脚本を提供したりもした。1933年からは右太衛門プロに転じ、35年までは美術主任として在籍記録がある。また、雑誌の評論も手掛けるなど幅広い活動を展開した。後年は静岡県湖西商工会に勤務。
- (22) マキノ輝子 (1907-1984)。俳優。マキノ省三の四女。尾上松之助主演作『曾我兄弟一代記』(1911、横田商会製作)以後、牧野省三監督作品に子役として出演し、マキノ等持院時代に本格的に女優活動を開始。『逆流』(1924、二川文太郎)で、人気を確立し、看板女優として活躍。1931年4月、沢村国太郎と結婚、共にマキノ御室を退社し、東活映画に入社。その後、弟の正博の日活太秦時代劇部入社にあわせ、32年、夫婦で日活入社。35年、新興キネマへ移籍するが、正博がマキノトーキーを設立すると夫婦で参加。37年4月、マキノトーキー解散により一旦家庭に入る。改名遍歴：牧野恵美子(本名)→マキノ輝子→マキノ智子→藤乃智子→マキノ智子→マキノ輝子→加藤智子。息子に長門裕之、津川雅彦がいる。
- (23) 大林梅子 (1907-1995)。俳優。本名：大林静枝。1925年9月に、マキノ映画の名古屋の興行主であった竹本にスカウトされてマキノ御室入社。大林静子の名で純情可憐な役を演じ、観客を魅了。マキノ正唯がマキノ正博に改名したのと同時期に大林梅子と改名し、沼田紅緑監督の遺作となった『江戸嵐』(1927)にも河原崎権三郎と共演した。また、同年、勝見正義監督の『文七元結』(1927)で初めての妖婦役に挑戦。『浪人街 第一話 美しき獲物』(1928、マキノ正博)では、牛裂きの刑に処せられる、女スリの役で脚光を浴びた。30年にマキノを退社し、31年南光明と結婚後、共に松竹下加茂へ入社。
- (24) 松浦築枝 (1907-1999)。俳優。本名：大野月枝。朝鮮釜山生まれ。マキノ省三の指示により月枝から築枝に改名。松竹下加茂で演技を学び、1925年のマキノ御室入社から解散までマキノ智子と共に、マキノ黄金時代を支えた。入社当時の嵐寛寿郎や、片岡千恵蔵の相手役なども務め、二人の退社後も南光明と共に正博の作品に出演し、『蹴合鶏』(1928)や『浪人街』三部作

(1928-29)にも出演するなど、功績は大きい。マキノ御室瓦解の瀬戸際には、名古屋や浅草で役者達と舞台に立ち、争議資金の調達に尽力した。32年には監督の松田定次と結婚し、正映マキノでも活躍するが、解散後は宝塚キネマに移籍。それも解散した後は太秦発声、エトナ映画などに出演する。しかしマキノトーキーが出来る時、夫と共に参加し、あくまでマキノを盛り立てた。52年、東映京都の専属となり、65年まで活躍した。

(25) 鈴木澄子(1904-1985)。俳優。1921年、大正活映入社。23年、小笠原プロを経由し、24年にマキノ等持院へ入社。その年に、帝キネの引き抜きに応じ移籍するが、間もなく解雇。25年6月にマキノ御室に入社後は、金森監督との『女怪』で妖婦役としての才能を開花させる。その後は同監督の『砂絵呪縛』でのお酉役、千恵蔵主演『万花地獄』(全五篇、1927-28、中島宝三他)でのお妻役で、その座を不動のものとする。28年に河合映画に引きぬかれ、杉狂児や松林清三郎らと共に演じ、演技に磨きをかける。29年には右太衛門プロへ移り、市川右太衛門の相手役として活躍する。その後は転々と会社を変わり、『佐賀怪猫伝』(1937、木藤茂)に出演後は、化け猫女優として人気を得る。

(26) 武井龍三(1905-没年不明)。俳優。本名:竹熊龍蔵。1925年『奇傑鬼鹿毛』(金森万象)以降マキノ御室にて、俳優として活躍し、高木新平に次ぐ“鳥人”スターとして人気が出る。金森監督との作品は『剣は鳴る 前篇』、『砂絵呪縛』、『正剣邪剣 前後篇』、『女怪』と、多数。28年に退社後千恵プロに参加、翌年武井龍三プロダクションを設立するが、失敗し、30年に右太衛門プロに移り、『旗本退屈男』(1930、古海卓二)などで共演。その後は松竹下加茂に転じて、脇役として41年頃まで活動した。

(27) 大谷友三郎(1899-1971)。俳優。1908年、大谷友衛門の弟子として初舞台。芸名を助丸、東蔵とした後、21年、大谷友三郎と改名。沢村長十郎一座に加わり、25年、長十郎のマキノとの映画出演契約にともない映画出演開始。長十郎が

映画を退いた後もマキノに残り、『正剣邪剣 前後篇』等に主演。27年、嵐長三郎(寛寿郎)、片岡千恵蔵らの入社と入れ違いにマキノを退社し河合映画へ移籍した後、伊井蓉峰の養子となり芸名を伊井友三郎として新派の幹部俳優となった。

(28) 松田定次(1906-2003)。監督。マキノ省三の庶子。1921年牧野教育映画製作所技術部に撮影助手として入社以来、等持院、東亜マキノ等持院、マキノ御室に在籍。22年に『女怪』で初カメラマンを務め、28年に撮影部から助監督部へ転じ『かわいそうな大九郎』で監督昇進。省三の死後、30年11月にマキノを退社し、帝キネ、新興キネマを経てマキノトーキー(1936-37)に参加。その解散により38年、日活京都に入社。47年、東横映画の発足とともに活動基盤を東横映画に移し(51年、東横映画は東京映画、大泉映画と合併し「東映」に改称)、東映の基軸監督として『鳳城の花嫁』(1957)など娯楽時代劇大作を量産。妻は女優の松浦築枝(32年結婚)。

(29) 嵐冠三郎(生没年不明)。俳優。日活退社後1921年、牧野教育映画製作所設立に参加。以来、マキノ等持院、マキノ東亜等持院、マキノ御室、正映マキノに在籍し一時は俳優幹事も務めた。

(30) 北岡よし江(1913-没年不明)。俳優。別名:北岡芳江。本名:北岡よし江。1925年、小学校卒業後すぐにマキノ御室に入社し、正映マキノまで在籍。父は俳優の嵐冠三郎。

(31) 生野初子(1907-1967)。俳優。幼時より女歌舞伎で演技を鍛え、1924年1月、マキノに入社し『山猫の眼』(1924、後藤秋声)で映画デビュー。マキノが東亜から分離した後は夫の高木新平(25年結婚、のちに離別)とともに東亜に在留。26年、東亜を退社し高木新平プロ(27-28)に参加。高木プロ解散後、地方巡業を経て28年4月、夫婦でマキノ復社。

(32) 高木新平プロダクション。1926年、東亜キネマから独立した高木新平が翌年1月に設立、吉田山の麓に撮影所を建設。妻の生野初子とともに

- 10作品ほど製作した後、28年解散。
- (33) 天野刃一(1907-没年不明)。俳優。中根龍太郎の弟子となり、東亜キネマへ入社した後、1925年、マキノへ移籍。月形龍之介の独立(28年1月)を知るとすぐに翌月マキノを退社し月形プロに参加。撮影中止のため実演を経て、29年に月形龍之介と共に下加茂入社し『斬人斬馬剣』(1929、伊藤大輔)などに出演。32年、右太プロへ移籍。美青年ながら敵役を得意とした。
- (34) 市川右太衛門プロダクション。1927年2月、マキノを退社した市川右太衛門が同年5月に設立、笹川良一の斡旋により奈良市郊外の「あやめ池遊園地」敷地内に撮影所を建設。
- (35) 片岡千恵蔵プロダクション。マキノの四国配給を請け負っていた三共社社長・山崎徳次郎の呼びかけにより全国の自由配給常設館が結成し大日本活動常設館主連盟映画配給社を設立。その基本理念(制作・配給・興行の三部制)に共鳴した千恵蔵が、1928年5月にマキノ御室を退社し、日本キネマの双ヶ丘撮影所内(右京区花園土堂町)に設立。
- (36) 岡島艶子(1909-1989)。俳優。1921年9月松竹蒲田入社。マキノ省三の説得により24年11月、東亜マキノ等持院に移籍、旧知の阪東妻三郎主演作の『墓石が軀する頃』(1925、二川文太郎)で狂気に満ちた美貌のヒロインを演ずる。25年6月マキノプロ設立により、マキノ御室へ移籍、可憐な娘役を得意とするマキノ主要スターに成長。愛くるしい風貌から綽名は「鳩ぼっぼ」。26年に衣笠映画連盟に参加するものの翌年再びマキノに復社。経営不振のなか30年8月に退社、夫で東亜キネマの監督・仁科熊彦(29年結婚)とともに第二次嵐寛プロに参加。解散後は富国映画などの小プロダクション、地方巡業を経て52年に東映と専属契約。後年は東映のみならず他社作品にも多数出演。賀古残夢監督は遠縁にあたる。
- (37) 阪東三右衛門(生没年不明)。俳優。東京生まれ。阪東三吉を芸名とする舞台役者であったが、マキノ省三に招かれ1928年5月、マキノ御室入社。初出演作は『天明果報談』。30年11月、マキノを退社し舞台に戻る。
- (38) 実川芦雁(1909頃-没年不明)。俳優。大阪生まれ。実川延宝の芸名で実川延若の門下となった後、1926年、中村雁治郎の意見により芦雁と改名。28年5月、片岡千恵蔵、嵐長三郎(寛寿郎)らと入れ違いにマキノ御室に入社し『仇討制度』に主演。舞踊(藤間勘翁門下)を得意とした。
- (39) マキノ登六(1910-1932)。俳優兼殺陣師。本名:林喜一郎。天活を経て、1923年にマキノ等持院に入社。片岡十六の芸名で殺陣師として活躍。27年4月、マキノ省三に才能を買われ、マキノ登六に改名。
- (40) マキノ正美(1911-没年不明)。俳優。別名:マキノ政美。本名:林正美。後に東洋シネマ(58年設立)社長。1925年8月、マキノ御室に入社。27年4月、林正美からマキノ正美に改名。
- (41) マキノ潔(1912-没年不明)。俳優。本名:井上喜吉。幼時に市川蝦四郎の門下となる。市川姉蔵とともに1920年9月日活関西入社。芸名を市川小蝦とする。21年4月姉蔵が急死。同年6月、牧野教育映画製作所設立に際し移籍、名子役として活躍。27年井上潔からマキノ潔に改名。51年大映東京に入社、春本富士夫と改名。
- (42) マキノ梅太郎(1907-没年不明)。俳優。本名:柳川勝好。1912年、中村福助門下として大阪浪花座で初舞台をふみ、芸名を中村福呂とする。青年歌舞伎を経て、27年4月マキノ御室に入社。28年5月マキノを退社し日本映画プロダクション連盟に参加(代わって、二川文太郎の弟子・田山通が二代目マキノ梅太郎を襲名)。29年4月に帝キネ(後に新興キネマ)に入社し中村梅太郎と改名。
- (43) 稲葉蛟児(1904-没年不明)。本名:稲葉義信。静岡中学卒業後、カメラの研究を目指し東亜甲陽の現像場に入所。その後、阪妻プロ『雄呂血』(1925、二川文太郎)の撮影助手を経てマキノに入社。主に二川文太郎に師事し、脚本家・西条章太郎(照太郎)の第一回監督作品となるはずであった『強者』(1928)を監督。マキノ解散後は右太プロ、エトナなどの小プロダクションを転籍

- した後、文化映画製作に身を投じ、戦中は中華
 電影作品に製作主任として関わる。後年は宝塚
 映画に在籍しテレビ映画の演出もおこなった。
- (44) 山中貞雄(1909-1938)。監督。1927年3月、京
 都市立第一商業を卒業、監督を志望してラグビ
 ー部先輩・マキノ正博を頼りマキノ御室に入社。
 マキノ在籍中の助監督時代は社堂沙汰夫、沙
 童敬太郎などと名乗った。28年10月、第一次嵐
 寛プロに参加し助監督をつとめる他、『鬼神の血
 煙』(1929、城戸品郎)の脚本を執筆。嵐寛プロ
 が崩壊し嵐寛寿郎らとともに29年、東亜キネマに
 入社し『鞍馬天狗』(1929、橋本松男)など次々と
 脚本を発表。32年、『磯の源太 抱寝の長脇差』
 で監督デビューを果たし絶賛を浴びる。その成
 功により32年に日活へ入社。鳴滝に住む稲垣浩、
 滝沢英輔、三村伸太郎らとシナリオ執筆集団「鳴
 滝組」を結成し梶原金八の筆名で寛プロ、千恵
 プロ、日活などに脚本を提供。38年に遠征先の
 中国で戦病死、P.C.L.での第一回作品『人情紙
 風船』(1937、東宝配給)が遺作となった。
- (45) 萩原遼(1910-1976)。監督。本名:萩原陣蔵。
 1930年、マキノ御室入社。マキノ解散後、34年、
 日活京都へ移籍し『お茶づけ侍』で監督デビュ
 ー。その後、J.Oスタジオ、東宝、新東宝、東横
 映画(後に東映)、松竹と転じ、多くのプログラム
 ・ピクチャを撮った。助監督時代に山中貞雄に
 師事し山中らが結成したシナリオ執筆集団「鳴
 滝組」に参加。山中の死後、追悼映画『その前
 夜』(1939、東宝)を監督している。
- (46) 滝沢英輔(1902-1965)。監督。本名:滝沢憲。
 1925年3月、東亜マキノ等持院に入社し兄・二川
 文太郎監督『乱刀』の脚本を執筆。マキノ御室設
 立にともない、27年1月、東亜より移籍し俳優兼
 助監督としてつとめるかわら、脚本も執筆。29
 年3月、滝沢憲から英輔と改名し『或る女と画家』
 で監督昇進。マキノ解散後、国太郎プロ、東活、
 日活太秦、右太プロ、新興キネマ、寛プロ、
 P.C.L.、東宝へ転ずる。この間、34年に結成され
 た「鳴滝組」に参加、数々の傑作時代劇映画脚
 本の合作に加わった。
- (47) 並木鏡太郎(1902-2001)。監督。本名:金田寅
 雄。1926年、西条照太郎の紹介によりマキノ御室
 に入社。助監督として『浪人街 第一話 美しき獲
 物』を担当する傍ら、山上伊太郎に傾倒し並木
 鏡太郎、狂太郎、鏡次郎等の筆名で脚本を執筆。
 29年6月、『夜討曾我』で監督昇進。マキノ解散の
 後、帝キネ、東活を経て、第二次寛プロに入社し
 「右門捕物帖」シリーズなど、数々の嵐寛主演に
 よる娯楽時代劇を発表、嵐寛映画黄金期を築く
 が、寛プロ解散により右太プロ、東宝へ転じる。
 戦後しばらくはマキノ芸能社に在籍し舞台演出
 などを手がけ、49年に得意の嵐寛主演『右門捕
 物帖 謎の八十八夜』で映画界に復帰。60年に
 映画界を引退し大平洋テレビに籍をおいた。
- (48) 杉本九一郎(生没年不明)。助監督。1929年に
 マキノ御室に在籍記録あり。吉野二郎、中島宝
 三らの助監督として『万花地獄 第三篇』(1927、
 吉野二郎)などの作品を担当した他、『狐と狸』
 (1929、吉野二郎)などの脚本も執筆。
- (49) 河合広始(生没年不明)。大道具。牧野教育映
 画製作所設立(1921年6月)に際しマキノ省三と
 行動を共にし日活を退社。以来、マキノの大道
 具、舞台装置の主任をつとめる。1928年3月にキ
 ャメラマンの田中十三とともにマキノを退社、双ヶ
 丘(右京区花園土堂町)に京都初の貸スタジオ・
 日本キネマ撮影所(通称双ヶ丘撮影所)を設立。
- (50) 松村清次郎(生年不明-1957)。小道具。千本
 座を皮切りにマキノ省三に付き従い、古株の小
 道具として珍重されていた。在籍記録としては
 1925年のマキノ御室から。後年は東映で小道具
 係を務めた。「清治郎」、「清二郎」、「精治郎」、
 「清太郎」、「清三」の表記あり。なお、同時代の
 日活太秦に別人物松村清太郎が撮影技師とし
 て存在している。
- (51) 大海源太郎(生没年不明)。照明技師。詳細不
 明。1925年に「光線」部として、29年から31年ま
 で「電気主任」あるいは「照明部主任」としてマキ
 ノ御室に在籍記録がある。
- (52) 藤林甲(1908-1979)。照明技師。1925年マキノ
 入社。マキノ解散により31年松竹京都に入社し

- 『雪之丞変化』(1935、衣笠貞之助)などの照明を担当。37年東宝に入社するが東宝争議を機に新東宝へ移籍。54年日活(技術課照明係)へ入社。
- (53) 都村健(1899-1982)。映画宣伝者、後に通信合同社代表。本名:井上健三。1923年、関東大震災を機に京都に居を移す。新聞記者であったのをマキノ省三に買われ、同年マキノ入社。28年に御室撮影所内に宣伝部が設置されると部長として雑誌『マキノ』などの編集・発行を手がける。マキノ解散後、東活の宣伝部長を経て、37年、通信合同社に入社、『合同通信』の編集に携わる。
- (54) 西郷昇(生没年不明)。俳優。詳細不明。1925年に「御室スタジオ専属」として在籍記録あり。
- (55) 高岡昌嗣(生没年不明)。別名:木村政次郎、高岡政次郎。1925年に木村政次郎の名で「御室スタジオ専属」俳優として在籍記録あり。父の代より自宅に馬を所有し、草競馬の調教もつとめた。56年、東映京都撮影所裏に馬場が建設されると、そこで馬術を教えるなど馬に関する一切を取り仕切る。後に、東伸テレビ映画(62年設立)代表取締役。息子の政昭(後に東伸テレビ映画取締役)も馬術を心得、親子三代にわたって映画と馬関連の仕事に携わった。
- (56) 笹井栄次郎(1876頃-没年不明)。別名:笹井栄志郎。千本組当主・笹井三左衛門(1855-1939)の二男。マキノ御室に「事務部」を経て「顧問代理」として在籍。
- (57) 羅門光三郎(1901-没年不明)。俳優。本名:岩井憲次。1921年、新派の成美団に入団、武村新門下となる。27年大阪港パーク撮影所製作の『彼は復讐を忘れたか』(悪麗之助)に端役出演し映画デビュー。翌年東亜キネマへ入社し光岡竜三郎の弟子となり、羅門光三郎を名乗る。東亜キネマの解散後はその代理会社・東活を経て、32年妻の原駒子(31年結婚、34年離婚)とともに富国映画社に入社するが同年のうちに解散、夫婦で宝塚キネマへ入社。後、千恵プロ、日活太秦、第一映画、極東映画甲陽、今井映画製作所、新興キネマ、大映と活動の場を広げ、63年の『座頭市凶状旅』(田中徳三)まで250本以上の作品に出演した。
- (58) 団徳麿(1900-1987)。俳優。本名:山本徳麿。新派俳優・松尾次郎一座に入り1916年に谷本若葉を名乗り初舞台を踏んだ後、数々の劇団を渡り歩いて芸を磨き、10代にして老役を得意とする。24年にマキノ省三に憧れて東亜マキノに入社、太田黒黄吉を芸名とする。東亜からマキノが離脱した後も東亜に残留し、個性的なマスクを生かし怪優と称される異色スターとして活躍。30年に帝キネ(後に新興キネマ)を経て36年2月にマキノトーキーに参加。戦後は東映京都で時代劇映画やテレビに多数出演。
- (59) 原駒子(1910-1968)。俳優。本名:倉形駒子。弁士・原天波の娘として幼時から舞台にたつ。奉公先の六車修(当時は松竹蒲田の俳優兼監督)が、関東大震災を機に京都へ移った際に同行し松竹下加茂の大部屋女優に潜り込む。帝キネ、東邦映画を経て25年、マキノ独立後の東亜キネマに入社し手薄となった俳優陣のなかで一気にスター女優への道を駆け上がる。ヴァンプ女優と称され、酒井米子、鈴木澄子と並ぶ人気を誇った。東活映画、富国映画、宝塚キネマ、日活、第一映画などを経てマキノトーキーに招かれ再び主演級女優として活躍。羅門光三郎夫人でもあった(31年結婚、34年離婚)。
- (60) 伊井蓉峰(1871-1932)。俳優。本名:伊井申三郎。1891年川上音二郎一座に参加。まもなく一座を離れ、吾妻座(浅草)を拠点に男女合同改良演劇済美館を起こすなど、写実的演劇を目指した。新派劇界の重鎮として君臨。映画出演は『実録忠臣蔵』(1928、マキノ省三)のみ。
- (61) 尾上松之助(1875-1926)。俳優。本名:中村鶴三。5歳のときに近所の芝居小屋で尾上多見雀を芸名として初舞台をふみ、以来子供芝居に出演。1889年に青年芝居の一座に加わり、旅芝居役者となる。1892年から尾上鶴三郎を名乗り、1900年に尾上松之助と改名。1909年、地方巡業中にマキノ省三に見い出され、千本座に出演するようになる。さらに横田商会製作の『碁盤忠信源氏礎』(1909、マキノ省三)に映画初出演。以

- 降、マキノ省三・尾上松之助コンビで次々とヒット作を連発。幼時から鍛えた身軽さと躍動的な演技ですぐさま注目され、またよく動く目玉から“目玉の松っちゃん”として親しまれる。12年に横田商会が他社と合併し日活が創立。日活で製作した忍術映画『児雷也』(1914、牧野省三)などでの成功によって、空前絶後の人気を誇る。21年には大將軍撮影所所長にも就任し重役スターとして君臨。驚異的なペースで出演し続け、25年に一千本記念映画として『荒木又右衛門』(1925、池田富保)を総指揮、主演。義弟・池田富保監督の『俠骨三日月 前篇』(1926)での彦根ロケ中に心臓病で倒れ、9月11日に自宅療養中に52歳で逝去。16日に日活社葬として盛大な葬儀が行われた。現在、松之助映画を監督した小林弥六らとともに立命館大学脇の等持院墓地に眠る。
- (62) 石本秀雄(1906-1965)。撮影技師。1922年、マキノ入社。25年8月、撮影助手から撮影技師に昇進し『猿』(富沢進郎)を担当。28年5月マキノを退社、千恵プロ創立メンバーとなり数多くの傑作産出に貢献。千恵プロ解散後は日活、大映、東映松竹京都にて第一線で活躍、名カメラマンと謳われた。
- (63) 三木稔(1902-1968)。撮影技師。別名:三木滋人。1916年Mパテー商会に入社。『先代萩床下』の撮影を初めて担当。21年東亜キネマ甲陽に入社した後、マキノ御室に移籍。「新鋭トリオ」と称されたマキノ正博と山上伊太郎と組んだ『浪人街 第一話 美しき獲物』(1928、マキノ正博)などでの撮影が撮影所内外で高く評価され、撮影部長の地位も得る。マキノ解散後は新興キネマ京都、第一映画、大映、松竹京都と転籍。47年、フリーカメラマンとなった後、東映京都に入社。後年、内務省技術審査員も務めた。
- (64) 南光明(1895-1960)。俳優。本名:鈴木光。1920年に小山内薫が設立した松竹キネマ研究所の研究生となり、『路上の靈魂』(1921、村田実)などに出演。21年7月、研究所が解散し松竹蒲田へ合流。23年に日活向島へ移籍した後、28年、永田雅一の斡旋により根岸東一郎とともにマキノに

入社し早速『蹴合鶏』(1928、マキノ正博)に主演。続いて『崇禅寺馬場』、『浪人街 第一話 美しき獲物』とマキノ正博監督作品に立て続けに出演。千恵蔵、嵐寛不在となったマキノを支え盛りたてた。マキノ解散後は東活映画を経て、松竹下加茂に入社。妻は女優の大林梅子(31年結婚)。

解題「助監督・管家紅葉 ——マキノ御室の青春」

I. マキノ入社

1. 入社経緯

マキノ作品の熱心なファンであった管家氏の入社時期は、阪東妻三郎の独立後から市川右太衛門入社以前という本人談に基づき、1925年7月～12月の間と推定される。撮影終了後に助監督採用されたという『探偵綺譚 文明の復讐』の公開日が、1925年12月4日であることから、この時期と見て間違いのないといえるだろう。ちなみに、嵐長三郎と片岡千恵蔵の入社は、管家氏が初助監督作品を担当した1926年の翌年である。

管家氏の通った関西工学専修学校は天神橋に近く、1922年に創立された。創立当時の校主・本庄京三郎氏は、大正信託株式会社と甲陽土地株式会社の社長であった⁽¹⁾。この甲陽土地株式会社は、当時の甲陽地域の土地を買収して甲陽園という一大娯楽施設を開設し、後に東亜キネマの撮影所、つまりマキノと合併時には現代劇部として機能する甲陽撮影所を設立した会社であり、管家氏と映画との縁を感じることができる。

映画好きの管家氏を育んだ天神界限には、1925年から1926年にかけて「八千代」の名を掲げた映画館が3館あった。日活特約の西区九条「八千代倶楽部」(1926年からは東亜・マキノ・ユニバーサル社特約)、当初は芝居小屋だった東亜・松竹特約の天神橋「天満八千代座」、同じく大衆演劇小屋から活動写真専門館を経て、1926年マキノ常設館となった港区九条通「九条八千代座」である⁽⁴⁾。

管家氏に支払われたマキノ助監督初任給25円は、我々にとって予想外の高額だったが、1930年の一般的な初任給と比較すると、旧制中学卒が20円、専門学校卒30円、師範学校卒45円、大卒は50～60円、小さい町工場では高等小学校卒で15円程度となり、専修学校卒の管家氏にとっては平均より低めと感じられたようである。ちなみに、映画入場料は封切館で50銭、3本立て10銭である。管家氏と同年入社⁽⁵⁾の並木鏡太郎の助監督初任給は20円、カメラマン石野誠三氏の等持院撮影所技術部初任給は30円と、各スタッフ間で若干の差があるにしても、マキノ映画は企業として社会的水準の給与を払っていたと言ってよいだろう。興行的成功や、技術面で功績をおさめた者には、奨励金が別途支払われていた⁽⁸⁾。

2. 金森組について

マキノ省三を御大と慕い、等持院時代からの古参としてマキノを支えた沼田紅緑、井上金太郎、二川文太郎、金森万象、寿々喜多呂九平、石野誠三らの中でも、金森組と称される金森・寿々喜多・石野のトリオは、質と興行両面で安定した作品を放つ主力メンバーであった。特に金森監督の力が発揮された活劇作品は、談話で触れられている“鳥人”スター、高木新平を生み出した『争闘』(1924)であり、神戸の海岸通りにあった大阪商船ビル8階からオリエンタルホテルに実際に飛び移った姿を、多くの見物人と共に、マキノ省三も見守った。活劇作品以外にも、祇園の悲恋を描いた祇園ものを多く手がけている。

管家氏が語った金森監督と寿々喜多呂九平との親密度は、彼らの住居変遷からも見てとれる。1928年まで二人はそれぞれ花園村に住んでおり、翌年から、嵐電の小松原駅⁽⁹⁾にほど近い等持院南町に、隣同士で住み始める。当時、脚本が評価されると省三から1本につき千円のボーナスを貰っていた寿々喜多は、大金が入ると脚本のネタ探しを口実に、大阪へ遊びに金森監督を屋根を伝って誘いに来たというエピソードも残っている⁽¹⁰⁾。マキノ映画に惚れ込んで、省三の家を尋ねて来た寿々喜多を、金森

万象が応対したというのが、そもそも彼らが出会った最初であるが、寿々喜多が亡くなると、金森監督は喪主として寿々喜多を見送り、最後まで彼らの関係は絶えることがなかったのである。

II. 助監督の仕事

1. 映画製作過程

映画撮影のスタッフ・ワークにおいて、管家氏在籍当時と現在との一番の違いは、仕事の分業化・細分化といえるだろう。トーキー以後に独立していく編集部(整理部)も当時はなく、現在では製作部などが行う、台本印刷、ロケーション現場の許可申請、出写会計と呼ばれていたロケ撮影の会計も、助監督の仕事であり、このような助監督生活を長く経験した結果、企業統合時に編集や事務といった部門へ移行していった映画人が多いのも事実である。無声時代の特徴ともいえる字幕部の主任として長年マキノに在籍した岡本一鳳氏については、鈴木影一郎氏が、「大変面倒見の良い、親父のような存在であった」と後に語っている⁽¹¹⁾。また、アーク灯(炭素棒に電流を加えて光を出す)⁽¹²⁾を基本とした照明も、この時代特有のものである。ロケ現場での見物人整理に、マキノの映画館無料入場券を配っていたというエピソードは、当時のスタッフ陣が、いかに智恵を絞って人払いをしていたかという一つの大変ユニークな方法として捉えることが出来るだろう。

製作日数が残り少なくなり、連日徹夜作業が進められる状態は、戦前戦後を通じて共通したエピソードだが、ここで言及された各社競映作品の『砂絵呪縛』は、当初から殺人的スケジュールで進行した驚異的な例である。各社競映とは、相乗的な宣伝効果を期待し、複数の映画会社が同一原作の映画化を同じ時期に公開する形式であり、本作では、東亜キネマ、日活、阪妻プロ、マキノが競映となった。この作品では、マキノを除く三社が原作連載紙の朝日新聞社に先に交渉するという競映のルール違反を犯し、その結果、新聞社との交渉が長引き製作開始が遅れたマキノは、憤慨して十日会⁽¹³⁾を一時脱退するにいたった。その混乱も、三昼夜で脚

色し終えた山上伊太郎の脚本により、8月21日に撮影を開始し、月末には全てを撮り終え、見事一矢を報いたというマキノらしい制作談で締め括られた。「こんな、忙しい撮影をしたのは初めてである」と金森監督も漏らしている⁽¹⁴⁾。

2. 難しさと楽しみ

この項では、多くの映画職人が語る助手時代と同様に、技師やカメラマン、監督の仕事を、見様見真似で吸収する字義通りの「見習い」として仕事を覚えていった助監督・管家氏の心情が吐露されている。

特に、智恵袋とも呼べる小道具方との交際が、仕事をする上で大変重要なものであったという管家氏の発言は、時代劇の助監督ならではの重みを持っているといえよう。また、この助監督の仕事の幅広さは、一人の人間に大きな責任と重荷を与えてもいたが、管家氏自身の、失敗から学習する克己精神と同時に、先輩や俳優との現場での意思疎通のやり方を含め、細かな心遣いと仕事に対する情熱が、助監督時代のみならずその後の人生を支えていたことも推察できる談話である。

Ⅲ. ロケーションでのエピソード

本章では、管家氏の在籍時を近年のフィルム・コミッション運動の萌芽期ととらえ、ロケーション撮影のエピソードを中心にお話を伺った。ロケ先の選択には、先輩たちから受け継がれた土地情報が広まっていたこと、拠点となる馴染みの休憩場所があること、土地の景観が作品に相応しいなどの理由が挙げられる。

1. 京都

京都でのロケ地選択は、撮影所から日帰り出来、手頃な休憩場所が近辺にあることがポイントとなっており、市内では撮影所近辺の嵐山方面から鳥羽、左京区大原方面、府内においては、園部や八木方面が多く利用されている。

なかでも時代劇の街道として頻繁に利用された

伏見区下鳥羽の城南宮は、桓武天皇が創建したと伝えられ、中世以降は辺り一帯の、産土神と方除け神社として信仰を集めた場所である。多くの映画人の休憩場所として利用された「おせき茶屋」は、現在国道1号線の向かいにあるが、1932年までは現在の羅生門跡から南へ延びる旧街道（鳥羽街道）の赤池付近にあった茶店で、名物の「おせき餅」は、稲垣浩監督も、助監督時代に食べるのが大変楽しみだったとしている⁽¹⁵⁾。また、大原方面も、有名寺院が点在する上、山里で、桜ノ馬場と呼ばれる桜の名所もあり、頻繁にロケ地となっていたようだ。管家氏が懐かしげに語った「徳子さん」の茶店は土産物屋であり、彼の人は俳人のようなモダンな女性だったと言われる⁽¹⁶⁾。オープン・セット的な機能を果たしていた馴染みのロケ地ならではの、映画スタッフと地元の人々との触れ合いが伺えるエピソードである。

2. 江州(滋賀)

近隣諸県では、京都から近く手頃な滋賀方面のロケも頻繁に行われ、川を必要とする場合は旅館「あみ定」がある瀬田や、広大な土地が広がっていた今津の饗庭野⁽¹⁷⁾は、特に重宝された。

景勝地でもある瀬田の唐橋は、四条大橋になったり、江戸日本橋になったりと、作品によって変化した。橋の袂の「あみ定」は、京都の映画人にとっては尾上松之助の時代から馴染みの、あみ舟旅館である⁽¹⁸⁾。『松平長七郎』では、高さ二丈もある大掛りな船のセットをメインにしたロケとなり、メーキャップ等の支度部屋や、昼食時に蜆の味噌汁と鰻井を運ぶなど、「あみ定」が撮影拠点としての機能を果たしていた様子が、セットの船が崩壊したエピソード——激しい立廻りの撮影中に崩壊し、その時船上にいた松浦築枝が、あわやという所で救出された——とともに綴られている⁽¹⁹⁾。

3. 信州

『狼火』の信州ロケは、9月25日に出発し、上高地の大正池撮影から、飯田、木曾、飛騨と進み、10月12日帰京までの約2週間⁽²⁰⁾に及んだ。ロケ費が

膨んだ撮影隊に、帰京費を運んだ中部(名古屋)撮影所は、『実録忠臣蔵』(1928、マキノ省三)松の廊下シーン撮影を終え人員募集を開始した時期である。その協力の甲斐あって、帰京後のセット撮影も無事に終え、大アルプスを背景に進行する『狼火』は、その自然の雄大さ、馬を使ったシーンの迫力やスピード感で、日本の西部劇と評価された⁽²¹⁾。

4. 高松から岡山へ

新年挨拶など当時頻繁に行われた常設館の舞台挨拶廻りについては、金森監督も小旅行気分の楽しみだったようであり、常設館館主が俳優一団の旅費などを全て負担するなど、四国での歓待ぶりを華やかなエピソードとして綴っている。特に岡山には、中国、四国地方を中心に10数館を経営し、一立商店をおこした立花良介が一時期館主だったマキノ特約・マキノキネマをはじめ、有力な常設館と後援者がおり、何度も舞台挨拶に訪れている。

IV. マキノ御室撮影所の人々

1. 御大・マキノ省三

当時のマキノ映画は、冒頭の「M-Picture」⁽²⁴⁾とともに、「総指揮マキノ省三」のクレジットが一種の看板となっていたが、果たしてマキノ省三が実際に個々の作品に如何に具体的に関わっていたかについて、日本映画史のなかで疑問視されていた。本節での談話は、この問いに答えるための極めて重要な証言となっているだろう。

試写会場となっていた常設館は、この頃すでに京都土地興行の所有となっていた千本座(千本通一条上ル)ではなく、西陣マキノキネマ(西陣千本中立売上ル)と推察されるが確証は得られていない。数々の大部屋俳優の才能を見出したであろう省三のその慧眼は、ときに冷静にその才能を見極め、見限られたら最後二度と良役を得られずに消えていく俳優も少なくなかった⁽²⁵⁾。談話から窺える省三は、念願となった独立プロ・マキノの主としての氣勢に満ちている。マキノ最初のスター阪妻はすでにマキノを離れていたし、御室撮影所開設直

後には四社営業連盟が結成され、マキノ映画の興行を阻んだ。それに対抗するためにも有能な映画人の育成が急務であり、そしてこの時期においてこそ「日本映画の父」マキノ省三の辣腕が揮われ、市川右太衛門、嵐寛寿郎、片岡千恵蔵といった日本映画を代表する時代劇スター、脚本家山上伊太郎、監督マキノ正博が才能を開花させるのである。

2. 関わった俳優たち

後年、演技塾「マキノ会」を運営していた監督マキノ正博の演技指導力が、この頃すでに習得されていたということに本節では注目できるだろう。実際に自分が演じてみせる演出法は義太夫や浄瑠璃を会得していた省三譲りのもので、また姉マキノ輝子も、省三によって鍛えられた確実な演技力と美貌でマキノのトップ女優として人気を確立していた。すでに独立していた阪妻の後任スターとして、『探偵綺譚 文明の復讐』で輝子の相手役に抜擢された月形龍之介は以来、輝子との共演が続き、情念籠る二人の演技は「女夫劇」とまで称された——すでに妻子のあった月形と輝子との相思相愛は日本映画史における悲恋物語として知られている。

マキノ御室からは数々のスターが育ったが、驚くべきことに彼らの在社期間は現在の感覚から考えると極めて短い。例えば、鈴木澄子が2年半、市川右太衛門は1年半、片岡千恵蔵と嵐長三郎(寛寿郎)はわずか1年。ちなみに等持院時代の阪東妻三郎は2年であった。この新陳代謝の活発さはマキノの優れた特質であると同時にマキノの悲劇を物語る。そしてまた、スター育成に余念のないマキノでは、「マキノ青年五人組(マキノ青年派)」のような若手集団が省三の指示のもとに結成され(1927年3月)、売り出しを計ったのである。

3. 助監督仲間

1929年3月発行『マキノプロダクション』誌掲載の「撮影所所員全員名簿」で、助監督として管家紅葉、杉本九一郎、萩原遼、滝沢憲(英輔)、並木鏡太郎の名前が確認できる。松田定次と稲葉蛟児は1928年に各々監督に昇進している。萩原遼の本名は萩

原陣蔵。管家氏による陣太郎は当時の通名であったと推察される。⁽²⁷⁾

山中貞雄は京都市立第一商業の先輩・マキノ正博を頼り入社するものの、一見ぼんやりしているように見える風体から“昼行灯”と呼ばれ、マキノではまともな仕事を与えられていなかった。気の毒に思った正博のすすめで設立したばかりの寛プロに移籍、その後の活躍は映画史が教えてくれる通りである。管家氏の回想による“シャダヤン”⁽²⁸⁾が、さながら嵐寛寿郎の当たり役“むっつり右門”のごとく無愛想な人間像として表されているのは正確だろう——山中の「人見知り」はよく知られている。

談話に登場する山中貞雄、萩原遼、滝沢英輔、並木鏡太郎、松田定次らは、1933年に井上金太郎をリーダーとして「京都時代劇の新鋭監督の会」を結成、まさにマキノで温めた親交によるものだった。⁽³⁰⁾これは名高い「鳴滝組」⁽³¹⁾に先行する集団で、ここにおいても日本映画史におけるマキノ人脈の尊さが明らかになるだろう。

4. 裏方

前掲「撮影所全員名簿」によると、松村清次郎は「装置部」、大海源太郎と藤林甲は「配光部」、笹井栄次郎は「事務部」、西郷昇は「俳優部」に各々その名を記している。

この時代の撮影所は家族共同体的性質が色濃く、例えば松村清次郎が千本座の下足番から小道具係へ転身した生え抜き的人物であれば(この頃「装置部」に配属されているのは、前年3月に日活時代からマキノ省三と行動を共にしていた大道具主任の河合広始が弟子ともどもマキノを退社し、日本キネマを設立したこととの関連を指摘できよう)、笹井栄次郎もまたその素行不良の更正のために父である千本組当主・笹井三左衛門がその身柄を省三に預けたいわば身内であった。⁽³⁴⁾また当時御室撮影所内食堂にも千本組関係者が在職していたことから、笹井の斡旋によって撮影所に職を得る例が複数あったと推察される。⁽³⁵⁾

一家で在職する所員の例もよくみられ⁽³⁶⁾、“馬方”西郷昇と“子役”高岡昌嗣(子役時代は木村政次

郎と名乗った)父子も等持院時代からのマキノ一党で、高岡の母もまた日活、等持院時代からのマキノ省三側近で撮影所の賄方でもあった。⁽³⁷⁾自宅に馬小屋を所有していた西郷は、御室撮影所の楽屋風呂裏手の馬小屋も預かり、数10頭の馬が彼の調教のもと映画に出演(1927-28年『マキノプロダクション』参照)、高岡もまたのちに東映京都撮影所の馬場を預かり、父子で馬術の才気を発揮した。

1929年の『マキノプロダクション』誌には、御室撮影所にオープンカーやロケバスを調達していた自動車屋が、ときには出勤途中の撮影所所員を乗せて参じ、⁽³⁸⁾その数台の自動車にロケ隊を分乗させてロケ地へ出発するという、朝の撮影所風景が綴られている。この自動車業者が大海自動車かどうかは不明だが、一日貸切ともなれば30円もの金額を徴収したといひ、⁽⁴⁰⁾千本組と日活のような関係には相当しないと考えられる。⁽⁴¹⁾このような業者の登場は、映画産業拡大による大規模ロケーションの増加に加え、固定画面からダイナミックな移動撮影への転換といったシネマの事象とフィルム的事象の推移との連動を指摘することも可能だろう。⁽⁴²⁾

V. 撮影所界限

1925年6月、当時はまだ畑の広がる天授ヶ丘に、マキノ御室撮影所は設立された。新興目覚しいマキノでは多くのスタッフが新たに採用され、1929年の時点で所員は600人に及んだ。⁽⁴³⁾彼らの多くは1925年から26年にかけて開通したばかりの京福嵐山電車の北野線沿いに居を構え、御室撮影所のある妙心寺駅まで通勤していた。⁽⁴⁵⁾談話からは、こうした映画人たちを目当てにした飲食店や、映画界入り志願者の来訪による賑わいや混乱ぶりが垣間見える。そしていずれはこの御室撮影所から輩出された映画人が次々と近隣に独立プロを設立して、更に活況を呈していくのである。

管家氏が在籍していた時期の雑誌記事によるとマキノの野球チームは日活チームに二連勝している。⁽⁴⁶⁾等持院撮影所を中心に、マキノ御室撮影所と日活大將軍撮影所は半径1km以内に位置しており、

こうした交流が生まれるのもごく自然なことであった。この頃、名カメラマン宮川一夫が野球の腕を買われて日活大將軍に入社した事も、興味深い事実としてここに付け加えておこう。⁽⁴⁷⁾1930年代になると、日活太秦、マキノトーキー、千恵プロ(嵯峨野)、第二次寛プロによって「映画人大会」もおこなわれるようになり、昭和初期の社会現象でもある野球人気と撮影所街の福利厚生事業が一致した、まさしく「日本のハリウッド」洛西地域を謳歌する祝祭イベントと化したのである。

VI. マキノプロダクション終幕

マキノ省三生誕生五十年記念映画『実録忠臣蔵』のフィルム焼失。“マキノ生え抜き”の大道具主任・河合広始と、カメラマン・田中十三による日本キネマ(双ヶ丘撮影所)の設立。片岡千恵蔵、嵐寛寿郎らの大量スター脱退。マキノ名古屋中部撮影所の撤退。これらはすべて1928年の3月から5月の間にかけて起こり、マキノに甚大な打撃を与えた事件である。それでもこの年85本もの映画を製作し、とりわけノー・スターで撮られた『浪人街 第一話 美しき獲物』では、マキノ正博、山上伊太郎の才能を世に送り出した。翌年には『戻橋』(マキノ正博)で、日本映画史にトーキー映画の先鞭をつけたものの、その封切の2ヶ月後にマキノ省三が亡くなり、⁽⁴⁹⁾長男・正博が所長に就任。マキノ系封切館を次々と失いながらも、この年、前年を上回る104本の製作に励む。談話からうかがえる「平和」な時期はこの頃に相当し、管家氏のマキノ退社は1929年9月末からのストライキ直前であると推察される。1931年5月にマキノは株式化され、更正マキノとして再出発を図るが、その数カ月後には解散。翌年2月に設立と同時にステージ焼失に直面した正映マキノキネマもわずか1ヶ月後には解散した。

金森万象と帝産観光バスとの関係は現在明らかでない。マキノ解散後、映画界の第一線を退いた金森万象の軌跡を知るうえで重要な談話部分であろう。一方、石野誠三は金森万象監督のシボレー宣伝映画『見よ！この先駆者を』(1933、大沢商会)

の撮影を担当後、編集職に転向し、J.Oスタジオへ入社。満映を経て、戦後は山口シネマ(現・プラスミック)に在籍し、日本中央競馬会の専属として、パトロールフィルムの撮影を担当していた。

注

- (1) 大阪工業大学学園史編集委員会編集『大阪工業大学学園五十年史』(大阪工業大学、1972年、15頁)、大阪工業大学学園史編集委員会『創設史実篇』(大阪工業大学、1983年、16-18頁)。
- (2) 「全国映画常設館名簿」(『映画年鑑』昭和編Ⅰ、大正15年版、日本図書センター、1994年、143-144頁)。
- (3) 「全国映画常設館名簿」(『映画年鑑』昭和編Ⅰ、昭和2年版、日本図書センター、1994年、675-678頁)。
- (4) 前掲書「全国映画常設館名簿」(『映画年鑑』昭和2年版、677頁)。
- (5) 「第2部 昭和元年-10年の世相と風俗」(『実録昭和史』株式会社ぎょうせい、1987年、162-165頁)。
- (6) 「大正15年です。20円もくれたから、ぼくもびつくりしたんですよ」(並木鏡太郎「第三章 映画史の監督たち」『キネマを聞く』パート2、日本大学芸術学部映画学科編集委員会、江戸クリエート株式会社、1994年、104頁)。
- (7) 石野誠三「マキノ映画略年表」(『回想・マキノ映画』御園京平編、マキノ省三先生顕彰会、1971年、158頁)。
- (8) 例えば、当時の感度の低いフィルムに、紗をかけて雲の様子を出して見せたカメラマン三木稔には三百円。脚本の題名が気に入れば惜しみも無く、寿々喜多呂九平に千円など。(マキノ雅弘『マキノ雅弘自伝 映画渡世・天の巻』平凡社、1977年、138頁)。
- (9) 嵐山電鉄北野線は、当時等持院駅、小松原駅を通り、北野天満宮前の北野駅が最終となっていた。(京福電気鉄道社史編さん事務局編『京福電気鉄道50年の歩み』、1993年、12-13頁)。
- (10) 「『隣が空いているさかいに來いや』と言うので、

- 等持院の南町に呂九平と隣同士の家を借りたんです」「屋根伝いにやってきては、大阪へ行こうかとか私を誘いに来るんです」(金森万象「マキノ映画とともに」『INTERVIEW 映画の青春』京都文化博物館編、1998年、12頁)。
- (11)「その頃、およそ非芸術的な風貌の岡本一風さんがいて、おやじが倅を可愛がるようによく後輩の面倒をみてくれた」(鈴木影一郎「マキノ映画略年表」『回想・マキノ映画』[前掲、152頁])。
- (12) 帰山教正『シネハンドブック』(日本アマチュアシネマリーグ、1930年、183-192頁)。
- (13) 製作営業等に関する協議や利害の衝突を防ぐ役割を負っていた(山本夏男「砂絵呪縛に就いて」『マキノプロダクション』1927年11月号、62頁)。
- (14) 山本夏男「砂絵呪縛に就いて」前掲。
- (15) 稲垣浩「城南宮」(『日本映画の若き日々』毎日新聞社、1978年、108頁)。
- (16) 大原里づくり協会事務局長・宮崎氏による。
- (17) 現在の今津町、新旭町、安曇川町にまたがる広大な台地で、主に肥料や燃料採取の場所であった。明治22年に陸軍の演習場として一部が買い取られ、大津港から、多くの兵士がやってきた。後にこの土地はスキー場として開発されていくことになる。(今津町史編集委員会『今津町史』第3巻、2001年、104-112頁)。
- (18) ある冬の日に瀬田橋を五条の橋に見たてて撮影したという。(尾上松之助+中村房吉著『活動写真の大スター／目玉の松ちゃん—尾上松之助の世界—』日本文教出版株式会社、岡山文庫178、1994年、103頁)。
- (19) 詩芸悲路「黒船の沈没」『松平長七郎』(長崎篇) 撮影にからむ一大危難記」(『マキノプロダクション』1929年9月号、66頁)。
- (20) 「撮影所通信」(『キネマ旬報』1926年8月-9月号) 参照。
- (21) 山本緑葉「主要日本映画批評」(『キネマ旬報』1927年2月11日号) 参照。
- (22) 高松での歓待ぶりは、港では花火が挙げられ、映画館の専属楽団のマーチ演奏の中を船から降りると、一団は大勢のファンから花束を贈られ、飾られた人力車で街を練り歩き、常設館へ到着するといった様子であった。(金森万象「映画今昔」94、『消費者自身』1979年1月1日号)。
- (23) 東亜キネマ重役として、マキノとの合併に一役買った人物。後に阪東妻三郎と共に阪妻立花ユニバーサル連合映画の設立や、帝キネの長瀬撮影所の所長も務めた。マキノ御室倒産後も正映マキノ設立などに関与した。
- (24) タイトル部時代の二川文太郎が考案したマキノの商標。
- (25) 瀬川興志『マキノプロダクション・事始』(白川書院、1977年、172-173頁)。
- (26) 岡島艶子+新藤兼人「女優一代」(『講座日本映画2』、岩波書店、1986年、202頁)。
- (27) 当時「萩原陣太郎」の記名でマキノ誌に執筆している。
- (28) 山中貞雄は「形がつくまでは影^{シヤドウ}のような存在でいる」という意味で“社堂沙汰夫”と名乗り、周囲は彼を“シャダヤン”と呼んだ。
- (29) 「好漢！沙堂ヤンは俗にロング・ロング・アゴーで有名でした。(中略)当時の沙堂ヤンはむつり家で交際の下手な処なんか私と好一对で、右門捕物帖の主人公を地で行く彼だったのです」(嵐寛寿郎『映画ファン』1938年12月号)。
- (30) 前掲『評伝山中貞雄』、116頁。
- (31) 1934年に鳴滝に住む山中貞雄が近隣に住む仲間に呼びかけて結成し、梶原金八の筆名で時代劇映画シナリオを執筆。メンバーは稲垣浩、三村伸太郎、藤井滋司、八尋不二、土肥正幹(鈴木桃作)。
- (32) マキノ光雄「時代映画の三十年」1(『キネマ旬報』1957年4月上旬号、69頁)。
- (33) 「ドモ清と呼ばれていた小道具係のおっさんがいた。(中略)私が生まれる前からの父の子分で、私を非常に可愛がってくれたものだが、どんなに偉い俳優でも、この男がどると、頭が上がらなかった」(前掲『映画渡世・天の巻』、80頁)。
- (34) 柏木隆法『千本組始末記』(海燕書房、1992) 参照。

- (35)川浪良太「御室スタジオ二四時間」(『マキノプロダクション』1929年4月号、45頁)。
- (36)例えば、都賀家。父・都賀清司は俳優として母・都賀かつは結髪としてマキノ御室に在籍。子の都賀静子と都賀一司も俳優となった。他にも嵐冠三郎と北岡よし江父子のような例もある。
- (37)高橋治『純情無頼 小説阪東妻三郎』(文藝春秋、2002年)参照。
- (38)前掲「御室スタジオ二四時間」、44頁。
- (39)根岸東一郎「特集・俳優の見た監督／温顔童心そして自働車」(『マキノプロダクション』1929年2月号、95頁)。
- (40)前掲「御室スタジオ二四時間」、44頁。
- (41)日活は千本組から材木運送用のトラックを借り入れ、代わりに千本組は必要な材木の納入を一手にひきうけた(柏木隆法『千本組始末記』[海燕書房、1992]参照)。
- (42)なお、金森万象によれば自動車を用いて移動撮影をしたのは1919年、日活京都で「松之助の『忠臣蔵』」で、「オープンの自動車のステップに座布団を置いて、直にカメラを置いて撮影したのが最初(前掲「マキノ映画とともに」『INTERVIEW 映画の青春』、10-11頁)。
- (43)龍田三四郎「マキノ人分布図一読者課題回答一」(『マキノ映画』1929年5月号、58頁)。
- (44)撮影所開設と嵐山電車との密接な連動性については「洛西地域映画史聴き取り調査報告Ⅱ 小林昌典氏談話」(『アート・リサーチ』vol.2、2002年)を参照されたい。
- (45)前掲「マキノ人分布図一読者課題回答一」参照。
- (46)更二生「嗟峨・御室／ところどころ」(『マキノプロダクション』1927年9月号、62頁)。
- (47)宮川一夫「映画史を支えた撮影美学」(前掲『INTERVIEW 映画の青春』、162頁)。
- (48)「岡本健一」(『個人別領域別談話集録による映画史体系(その八)』日本大学芸術学部映画学科、74頁)。
- (49)マキノ省三原案によるディスク式トーキー『戻橋』の出来は芳しくなく省三の意気を消沈させた。このときの失敗がのちにマキノ正博を録音修行

へと向かわせ、さらにマキノトーキー設立へと繋がるのである。

【聞き取り調査】

- ・ 第1回 2002年10月19日10:00-14:00
於管家氏宅
聞き手—富田美香、紙屋牧子、大矢敦子、岡美里
- ・ 第2回 2002年11月11日14:00-18:00
於管家氏宅
聞き手—富田美香、紙屋牧子、大矢敦子、矢野維之
- ・ 第3回 2002年12月19日14:00-17:00
於管家氏宅
聞き手——富田美香

【執筆担当】

編 解 説：富田美香
テ ー プ 起 こ し：紙屋牧子+大矢敦子
談話・注・解題作成：Ⅰ-Ⅲ 大矢敦子+富田美香
Ⅳ-VI 紙屋牧子
資 料 協 力：板倉史明